

都留文科大学報

Vol.142
March, 2020

学長・副学長退任にあたって
さよなら文大／おくることば
旅立つことば／卒業論文題目
文大だより／ぶんだい堂





都留文科大学の将来

都留文科大学学長 福田 誠 治

6年の任期が過ぎました。

学長になった時には、先人たちが努力して学科を増やしたにもかかわらず、本学の志願者は長期的に減少傾向にありました。ピーク時と比較すると、初等教育・国文・英文の3学科では4分の1、新規の学科を加えても3分の1に減少していました。少子化が最大の原因ですが、全国の公立大学がこの40年間で3倍に増えたことと、私立大学で小学校教員免許を出す大学が3倍になったことも本学の志願者に大きな影響を与えています。このような時に学長を交代し、私がやろうとしたことは、他大学には無い教育を作り出し、ア

ピールすることでした。結果的には、この6年間で志願者数の減少を立て直し、ほぼ1割の回復を確保できました。教職員の皆様、同窓会の皆様のおかげと感謝いたします。

ただ、昨今の「大学教育無償化」の動きは、私立大学も同等に対象者には授業料として70万円まで国費で賄うことになります。特に文系の場合には、国公立は授業料が安いからというメリットは今後消滅していくものと思われます。東京に人口が集中しているように、仕事のあるところに人々は移動しますから、地方の大学はアピールできる良さを常に創り出し、伸ばし続けることが必要というこ



第60回桂川祭「学長と鍋しよう!!」にて



国際教育学科・北欧留学生ウエルカムパーティーにて

とになります。

第二に、この6年間で、学部を2学部、学科を6学科に拡大したことです。また、教員免許課程も、学校教育学科では、小学校教諭の1免許から特別支援、中学数学、中学理科を含めて4免許へと拡張しました。地域社会学科は、地域で活躍する人材養成という初心を明確化し、2専攻を4コースへと再編しました。これは、現代社会という高校の科目が40年の歴史を終えて廃止されるのを機に、公共政策と地域経営というコースに明確化したものです。国立大学の統合など大学再編成の時代には、様々な管理部門が強化されるため、組織運営能力のある多様な専門分野の教員を確保しながら、ある程度の規模を保つ総合的な大学としなければ、大学経営はきわめて困難になると判断できるからです。

第三に、グローバリズムへの対策があります。北米では1990年代から、またヨーロッパでは2000年代から大学の授業形態が急速に変わりました。アクティブ・ラーニングということばが大学にも公式に入ってくるのは、1991年のことです。これまで長年、大

学は、研究者が学問を教える最高学府と見なされてきました。一般の授業は、大人数の講義形式でした。学問を教えるというわけです。しかし、日本においても2006年に、教育基本法が改定され、大学が初めて学校教育行政の傘下に組み込まれる制度になりました。さらに、世界の流れは予想以上に進み、大衆化した大学は職場コンピテンス(知識・技能を状況に合わせて使う力)の育成を教育目的として明確化しています。

現代の欧米の大学の授業では、例えばまず20分間で教員がテーマを説明し、およそ30分間は学生グループで討議し発表、20分間は教員が疑問に対応し、20分間は個人が意見を文章表現したり実行する、といったように大学生自らが考え、課題解決するというように変わってきました。

文科省は今、このような変化を「学修者本位の教育の実現」、すなわち教師が「何を教えたか」から生徒・学生が「何を学び、身につけることができたのか」への転換と表現しています。大学の役割は、研究機関で働く専門的研究者の養成ではなく、卒業後社会に出

で職業人として働く、社会性を持った人間の育成ということになります。すでにこのことは現実となりつつありますが、法的に今後整備されるという意味です。

言い直せば、グローバリズムの中で、大学は、学問を教える場所というよりは学生の学びを支援するところに変化しています。米国では30年前に、ヨーロッパでは20年前にこの体制を整えました。限られた研究大学を除いて、大学教員は「教育職」にあり、主たる職務は教育です。体系の決まった学問や科学を教えるという立場から、問題解決に向けて探究する学生の成長をサポートする仕事へと変化しています。大学教員は単なる研究者から「研究力量を持った教育者」へと解釈が変りつつあるわけです。ですが、このようなことは、多くの日本の大学教員にはまだなじみの薄いものとなっています。

研究者かつ教育者という活動は困難です。日本の場合は、教員と事務職の間に「学びのコーディネーター」ないし「自立のサポーター」とも呼べる指導員ないし助手を、どの学科にも複数配置していくことが現実的な解決の道かも知れません。

欧米では個人主義の傾向が強く、「一人ひとりの人間は異なる」という前提から教育が始まります。それでもある心理学者は、この異なりは大きな力で決まってい個人には変えられないという「固定マインドセット」と、努力と経験を重ねることで誰でも皆大きく伸びていけるという「成長マインドセット」との二つに分かれると言っています。日本人は、誰もが皆正しい答えを学び、同じように行動すべきだという「同調マインドセット」に取り憑かれていますと言っても良いかもしれません。確かに、皆が一斉に同じことを考えるというのは、研究、探究の場である大学としてはふさわしいことではありません。学校と呼ばれる場所であっても、唯一正しい正解を教えるという教育は好ましいことではないでしょう。自分の人生のために学ぶ、自分を変え成長させるために学ぶといったマインドセットが、今の日本人には何よりも必要だと言えるかもしれません。学問とか科学が「固定マインドセット」を若者に植え付けないように、大学は気を付けなくてはなりません。

私は、このようなグローバリズムへの対応として、個人やグループで探究し、自分ある



創立 60 周年記念式典にて

いは自分たちの考えをはっきりさせ表現するという、「為すことで学ぶ」、いわゆるアクティブ・ラーニングを目的とする国際教育学科を新設しました。具体的には、まだ模索途中ですが、IB教育を取り入れることと、英語で授業、少なくとも多言語で授業することと、希望者全員が留学することを目標とすることにしました。IB教育は、コンセプト・ベースの教育として、世界的に実践可能なモデルとして定評があります。また、今や英語は、非ネイティブの使用者がネイティブの使用者の2倍以上存在するという特別な言語です。だから今日では、大学生は、「世界と交流するために」英語で学ぶ段階にあるべきと思います。つまり、これまでは日本語の壁に守られていたのですが、これからの日本人は多言語の人たちとチームワークで働いていくことになるのです。国際教育学科の交換留学は、入学・受講手続、寮・住居の確保、入国管理手続など学生が一人ひとり全て英語で交渉します。異国で生活し、トラブルを自分で解決していくことは、自分で自分の未来を創っていくという得難いプロセスです。とにかく、グローバルに通用する学びの窓は開きまし

た。この窓が大学全体の動きとなって、さらに大きく開くことを願っています。

可能ならば、都留文科大学は文理融合した領域を思い切って広げていくべきだと思います。スマホは、たった10年で人間個人の行動を大きく変えてきました。今われわれは、まるで人体の一部のようにスマホを持ち歩いています。移动通信技術は、人間個人とコンピュータをいつでもどこでもつなぐことができ、思考は世界を駆け巡り、バーチャルな空間でアイデアを容易に表現しています。合理的、論理的に、体系的な科学が研究・探究される場としてのかつての大学は、暗黙知が出会い、全体がまるごと直感として把握される、クリエイティブでイノベティブな工房として新たな存在意義を持つようになると思います。多分本学は、日本有数のUniversity of Applied Sciencesと呼べる理論と実践が融合する大学となり、アナログ世界とデジタル世界が交差するユニークな学びと創造の場として生き残ることだろうと想像しています。





副学長を退任するにあたって

副学長 阿毛 久 芳

最近、紅野謙介著『国語教育 混迷する改革』を読んで、あっと思うことがありました。冒頭、「背中から未来に入る」という見出しで、堀田善衛のエッセイ「未来からの挨拶—Back to the Future」が紹介されていて、「未来は私たちの背後にあって、見るができない。その見えない未来に向かって、私たちは後ろ向きに背中からこわごわ進んでいくことになる。」とその意味を説明しています。

高村光太郎の「道程」には、「僕の前に道はない／僕の後ろに道は出来る／ああ自然よ／父よ／僕を一人立ちにさせた広大な父よ／僕から目を離さないで守る事をせよ……」という決意とこれから歩む遠い道程を思う祈りが織り込まれています。まるで広大な雪原に立った上での見通しの良さがうかがわれます。でも、愛する妻智恵子の精神の病と死に出会い『智恵子抄』を出版し、『典型』（昭和25年）の「暗愚小伝」では、自分の間違いの根拠を検証し、自己流謫の生活を送るということがありました。先は見えないのです。

これからの大学の将来を考えた時、手探りで進むしかないという思いがします。現在をどうとらえるかは、過去をどう洞察しているのかと関連し、その洞察を踏まえた現在の認識で確かだと思えるものに基づいて進むしかないのでしょうか。見通しのきかない障害が次々現れますが、進まなければ、沈みます。停滞は許されないというのが、私の認識です。

初代学長の諸橋轍次が示した「菁莪育才」とは、まさにこの困難な状況の中で拠り所とする原点であり、学ぶことにより成長することを喜びとする教育の場であり続けなさい、ということでしょう。この学訓は学生ばかりでなく、教員にも職員にも同様にいえることだと思います。

四十年近く前、勤務していた国立大の附属高校は研究に理解ある職場ではあったのですが、研究時間を確保する厳しさ（と反面のやりがい）を痛感していました。裁量労働制という言葉も知らなかったのですが、授業準備や研究する日が日曜以外でも複数あり、存分に使えることが本当に夢のようでした。ありえないことがここにある！ という感動が、都留文科大学で勤め続けられた源です。学生との交流も本当に近く、大学会館に泊る日々も楽しかったのです。最近、出校日、授業数が当然のノルマのように先生方に思われる傾向にあるのではないかと、という危惧を持ちます。他では当たり前ではない、ありがたさが都留文科大学にはたくさんあります。大事にして下さい。

古い写真は着任して数年後の卒業記念アルバム用に撮られたものです。「一瞬を何気なく撮ったものだが、皆は先が未知の状態、それゆえだろうか、それぞれの表情に何か決意のようなものが感じられるのが、不思議だ。」とずっと後で記しました。このような学生たちに出会えたことは、本当に幸せです。





副学長退任にあたって

副学長 新 保 祐 司

私が、都留文科大学に文学部国文学科の助教授として奉職したのは、1996（平成 8）年の 4 月 1 日でした。1998（平成 10）年の 10 月 1 日付けで教授に昇任し、その後、2017（平成 29）年 4 月に開設された文学部国際教育学科に移籍しました。2014（平成 26）年 4 月からは、理事・副学長を兼ねました。

2019（平成 31）年 3 月に定年退職し、名誉教授となりましたが、理事・副学長として 1 年のこり、この 3 月に退任することになりました。

このように都留文科大学には、24 年間の長きにわたり勤務したことになりますが、心身ともに健康で過ごせたことは、教育・研究・学務の仕事において教職員の皆様のご理解・ご支援があったればこそと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

私が、文芸批評家の道を歩むことに決定的な影響を与えた小林秀雄の三十歳の時の作品「X への手紙」の中に「或る苦勞人に言はせると、『光陰矢の如し』といふ諺が、凡そ人間の発明した諺のうちで、一番いゝ出来ださうである。」とあります。着任した頃、国文学科でお世話になった先生たちのうち、鷺只雄先生、高橋宏幸先生、樋渡登先生、楠元六男先生の四人の先生方が既にお亡くなりになり、私も「光陰矢の如し」という言葉が実感として心に沁みる年齢になりました。

私は、大学卒業後、出光興産という出光佐三が創業したユニークな会社に入社しました。そこで 18 年ほど勤務した後、大学の教員に転職しましたので、着任後は戸惑うことも多々ありました。しかし、先にお名前を挙げた先生方をはじめとする多くの教職員の皆様のご助言により、何とか新しい組織に馴染むことが出来ました。

ほぼ四半世紀に及ぶ都留文科大学での仕事を通して、多くのことを学ばせて頂きました。それまでの職場環境から大きく変わりましたので、興味深くもあり、いろいろ刺激も受けました。特に為になったのは、大学会館に毎週 2 日泊まったことです。共同風呂、共同便所のスタイルもいい経験でしたし、何よりも談話室で夜遅くまで、学科を越えていろいろな先生方と多くの場合ビールなどを飲みながら、様々なことを語り合ったことです。私の人生の教室の重要な一つは、大学会館の談話室であるといってもいいかもしれません。

42 歳から 66 歳までという、ある意味で人生において最も仕事ができる時期に、都留文科大学の教員として働けたことは、自分の可能性を十分活かすことができる環境に恵まれたことであつたと深く感謝しています。また、ゼミの卒業生が、それぞれの場所で活躍していることを年賀状などで知りますと、教育者としてそれなりの貢献ができたのだととてもうれしく思います。

最後になりますが、今後の厳しい大学間競争に都留文科大学が勝ち残っていくことを祈念致しまして、退任の挨拶とさせていただきます。



大学会館



ラスト・ソング

比較文化学科 分田 順子

最終講義から一夜明け、河口湖では穏やかな雨の朝を迎えました。温かな雨が残雪を解かすのを目にすると、冬の間に固まっていた思考もほぐされ、都留での26年の研究と教育の途上で迷い込んだ袋小路を出られそうな予感があります。

「ベルファスト・フレスコー紛争／平和創出×女性×アート／ドラマ」と題した最後の講義で何よりも伝えたかったのは、北アイルランドには、紛争が残した分断を、自らの力と創意工夫によって乗り越えてきた人々の平和創出の営みがあるということでした。それは、未だに恐怖と沈黙の支配する社会に、誰もが自由に語れる場を切り拓き、そこで互いの安全を保障し合いながら、往々にして相容れない物語に耳を傾け合うという営みでした。私は2001年の春に渡ったベルファストで、人々がそれを People's Peace Process と呼ぶのを知りました。

以来私は、分断社会の暗闇を照らすトーチ・ライトのような物語を、演劇作品を中心に涉猟し、北アイルランドの来し方と行方を探る手掛りとしてきました。そして、そうした物語が世界中に遍在することに気づかされました。その探査と玩味に夢中の日々からもたらされたのが、平和創出という課題に、女性という変革主体が、演劇という手法で挑む様を捉えるという研究テーマでした。最終講義では、そこに行き着くまでの旅路を、今日は、私が歌う番とばかりに語らせていただきました。

紛争・平和研究では、決してオーソドックスとは言えないこの研究テーマに最初から確信があった訳ではありません。そしてその探究の場を自分のフィールドと呼べるようになるには時間がかかりました。独自のフィールドを切り拓く喜びに後押しされながらも、そこで得た知見をいったい誰に向かって、どう語ればよいのか決めかねてきたのです。自分には、フィールド

で託された物語の真価を、伝えるべき相手に伝える責任があるという気負いがあったからかもしれません。

それでも、旅の途上で目にした光景や出会った人々、彼らの手掛けた仕事は、教会の天井に描かれたフレスコ画のように自分の脳天に焼き付き、それらについて語るよう私を促しつづけました。聴き手となってくれたのは、都留の学生たちでした。そして「比較文化総合」で北アイルランドの物語について話す時、私には、比文の学生なら、この社会をすべての人に開く仕事を担いうるという期待がありました。

実は昨日の最終講義も、私がフィールドで託された物語を、この社会に暮らす隣人としての同僚や卒業生に語る最初で最後？の機会でした。熱心に聴いてくださった方からは、後で、自分のフィールドについても語りたいことがあったと伺いました。北アイルランドから届くモノローグに耳を澄ますことから始まった旅の果てに、このようなダイアローグに立会うことになり、私は長年の逡巡から解き放たれる思いでした。私は、ただ一人の語り手として、立場やことばの違いに怯みながらも、境界の向こうの物語の場に加われば良かったのです。そこで同様の心許なさを抱えた他者と出会い響き合えば見える地平がきっとある、今朝はそう信じて都留を旅立てる幸いに充たされています。



最終講義のスライドより



Homage to TsuruBun

英文学科 教授 Hamish Gillies

Nine years seems to have passed inordinately quickly. It seems like yesterday that I made the significant move from Hiroshima to Tsuru, not knowing exactly what was waiting for me there. All I had to go on was my wife's experience of having studied in the English Department at TsuruBun in the 1990s! I must confess I was somewhat daunted by going from a predominantly foreign-colleague work environment to a department where I was the only non-Japanese full-time faculty member. (Fast forward nine years and there are now three of us in the English Department!). However, this 'immersion' experience was made immeasurably easier by the warmth and helpfulness of my new colleagues, and this brings me to the main point of my message: what I will miss most about working in TsuruBun are the people. The Administration Staff,

the Teaching Faculty, and of course the Students. The Admin Staff somehow manage a superhuman workload, and yet they have always been so friendly and helpful, even despite my 'unique' Japanese ability! My teaching colleagues, both inside and outside the English Department, have likewise helped make my time at TsuruBun an enjoyable and fulfilling experience. And finally, and arguably most importantly, the students at TsuruBun are what makes this university unique. Coming from all over Japan, they create a truly cosmopolitan and open-hearted atmosphere on campus, and they have been an absolute joy to teach. I would therefore like to say a huge thank-you to all of you. As I move on now to a new institution, part of me will always remain in Tsuru.





退職のご挨拶

国文学科准教授 田 口 麻 奈

二〇一六年度に着任して以降、教育・研究の両面において充実した時間を過ごさせて頂きましたが、この度、他大への異動に伴い本学を退職する運びとなりました。ちょうど四年間の在職でしたので、着任時に一年生で、基礎演習などを指導した人たちが卒業するのと同様の退職となります。それだけに、この先もどこか卒業生にも似た気持で、本学を懐かしく思い出さるうな、と感じています。この四年の間、毎年のゼミ合宿や、泊りがけの「日本文化史演習」などで皆さんと一緒に旅行に出かける機会も多く、楽しい思い出がたくさんあります。また、この度閉会することにはなりますが、国文学科の有志の皆さんと運営してきた「近代詩研究会」でも、戦争詩の問題を扱った人気の漫画作品と一緒に読んだり、文学館で関連展示を見たり、生き活きた学びの時間を共有できました。すべて私にとって大切な財産です。引き続き、長い教員生活が控えているとはいえ、常にこうした意欲ある学生や活気ある環境に恵まれるとは限りません。実り多い時間を、本学の皆さんと過ごせたことを、心から有難く思っています。

普段の講義でも、こちらが絶対に手を抜けないと思うほど鋭い反応を示してくれる人が本学には多くいましたが、とりわけ、ゼミのメンバーと議論を重ねた時間は、私にとって特別な記憶です。一つの作品をめぐる異なる読み方や評価が存在する時、その隔たりやすれ違いを対話的に、でも誤魔化さずに確認してゆく作業というのは、実のところ相当な気力と能力を必要とします。「あなたはそう考えるんですね、私は違います、おしまい」となってしまう人が、世間には本当に多くいます。ここは自慢していいだろうと思いますが、私が同じ卓を囲んできたゼミのメンバーの多くはそうではなくて、自分の思う作品の

価値について、他人と認識を共有するために言葉を尽くすことが出来る人たちでした。彼ら、彼女らのような人たちは、卒業後、色々な職場で、また地域で、世間に流通する様々なコンテンツに対し、能動的な批評性を発揮してくれるでしょう。よく出来た、しかし欺瞞的な物語に騙されないこと、あるいは自分の感性そのものにも騙されないために、先行研究という名の他者の言葉を注意深く吟味すること。大学でそうした作業に真摯に向き合うことのできた人たちが、どこまでも相対化していく文学なるものの価値をこの先辛うじて支えていくだろう、と私は思っています。

本学には、あと少し非常勤講師としてお世話になることとなります。まだしばらくこのキャンパスの四季を眺められることや、学生の皆さんとの対話を続けられること、パンカムでコーヒープレイクが出来ること、よくして頂いた教職員の皆さまとお話する機会もあることを、とても嬉しく思っています。心から懐かしい四年間を過ごさせて頂いたことの感謝をお伝えするとともに、本学の皆さまの末永いご健勝をお祈り申し上げます。



ゼミ生からのお祝い

おくることば

都留文科大学の学生の 素晴らしさ



学校教育学科准教授
春日由香

都留文科大学の学生の素晴らしいところを三つ、挙げます。

一つ目は「誠実に真面目に努力するところ」です。「自分はあまり努力しなかった」と思う人も、いるかもしれません。しかし私は、講義で丁寧にノートに記録する姿や、グループワーク・実技に取り組む皆さんの姿を見る度に「全国の大学生の中でも、真面目さはトップクラス」と自負していました。覚えておいてください。人は一生、努力をしなくてはなりません。学び続けるのです。

二つ目は「周囲の人々を大切にするとところ」です。サークルの仲間との交流、ゼミ担当教員との対話、

アルバイト先で出会った人々との協力、それらを見聞するたびに、この都留で深い交流を経験して成長する皆さんのことを、誇らしく思っていました。ぜひ、これからの人生で「人」を大切にしてください。人は人によって、生きていくのです。

三つめは「迷い続けるところ」です。この4年間、皆さんから多くの「迷い」と「悩み」を聞きました。教師になるべきか、企業に就職すべきか、小学校と中学校のどちらを選ぶべきか、地元に戻るか、首都圏に行くか。様々な「迷い」を聞きながら、迷えることこそ若さの証だと思いました。ともすれば、落ち着いた方向へ楽な方向へと自分を導いてしまいがちだった私が、皆さんと対話することによって、「迷う」方向へと踏み出すことができました。感謝しています。

2020年を迎えた今、社会も未来も混沌としています。予測不可能という言葉が胸に突き刺さる状況が、私達を待ち受けています。しかし、この三つの素晴らしい長所を糧にして、自分に「自信」をもってください。その「自信」が、皆さんの未来を拓きます。

卒業、おめでとうございます。

おくる言葉



国文学科教授
野中 潤

2016年4月、28年間にわたって勤め続けた聖光学院（横浜）の教壇を降り、都留文科大学に着任しました。つまり、4年間で卒業する諸君と、ここまで一緒に歩んできたこととなります。卒業生諸君にとってのこの4年間は、いったいどんな時間だったのでしょうか。

私にとってのこの4年間は、絶え間ない変化に向き合い続ける時間でした。気がつくと、マネー（価値）もブック（情報）もデジタル空間に大きくシフトし、文学も教育も「そもそも…」

という問い直しにさらされています。「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。」というダーウィンの言葉が、あらためてリアルに胸に響いています。

「未来からの留学生」という言葉があります。小学校であれ、中学校であれ、高校であれ、学校という場での学びは、未来という「母国」で十全に生かされることが期待されています。もちろん、4年間という時間を都留で過ごす文大生の学びも、先哲の知恵を貪欲に吸収した上で、よりよい未来を切り開くためのものです。どんな時代になっても通用する「不易」としての学問の価値は、「流行」が前景化する時代だからこそ真価を発揮するはずなのです。「文大生」としての誇りを胸に、4月からの新たなステージに進み、不易と流行を諸共に抱えながら未来に向けて力強く漕ぎ出してください。

卒業おめでとう！

Have the Courage



英文学科教授
Prof. Kola Olagboyega

Very many congratulations on your graduation. You have worked very hard for four years or more to earn your degrees. You deserve all the praises and admiration.

Most of you will go into the world of work. For most of you, the next forty to fifty years will represent a cycle of work, work and then family, and work, work, work. This is good if you love what you do. You must love your work; and if you do, you will enjoy doing what you do so it would not seem like work anymore.

For those of you who do not enjoy your work, my advice to you is to “have the courage”. Oprah Winfrey says, “you get in life what you have the courage to ask for”.

Why is courage important and why must you have it? If you want to be happy in your life after your university education, you must have the courage to do what you really want to do. Otherwise, you will be working for that company day-in, day-out, and before you realize it, it is time to retire. You then begin to wonder where all the time has gone. More importantly, what happened to the dreams you had when you were at the university? What happened to the dreams you had to travel the world; to volunteer in a developing country; to study more; and to do many other things?

What your education and socialization process have not prepared you for is to question the status quo; to think for yourself and behave differently in order to do whatever you want to do. To achieve your dreams, you must have the courage to stand up for yourself, by enduring the hardship that will lead to your everlasting happiness; by being that proverbial “nail”, but one that refuses to be hammered down.

Meanwhile, you must remember that our successes are conditioned by the amount of risk we are ready to take. And, the big fish is never caught in shallow waters. If you don't have the job you love, be prepared to risk anything. Eventually, you will gain everything and you will be happy. I wish you happiness throughout the remaining days of your lives.

未知への扉を片手に



地域社会学科講師
小島 恵

それぞれに学問を修めて旅立つ皆さんに伝えたいのは、これからも学びを大切にしてほしい、ということです。特に、本を読むということ大切にしてほしい。私が小学生のときの国語の先生が、「本というのは、両手におさまるくらいの小ささなのに、時代も場所も越えた世界に私たちを連れて行ってくれる」というお話をされました。大学の美学の先生も、「歴史的風雪に耐えた知や美の結晶である本が数百円で手に入るのに、それに手を出さないくらい愚かなこ

とはない」と仰っていました。

皆さんが生きる時代は、今までよりも想像する力が求められるのではないかと思います。未知のものを怖れず、他者の立場に思いを馳せながら対話を続けていくことなしに、多くの人が幸せに生きられる社会はつくれないのではないのでしょうか。本を読むことは、未知との出会いです。それは必ず、人の想像力を鍛えてくれます。

いつも皆さんの片手にあるスマホは色々な世界を見せてくれるでしょう。でも、皆さんが打ち込むキーワードは、必ず既知のものです。未知の言葉は検索できません。当たり前ですね、未知なのだから。つまり、皆さんがその綺麗な画面で見ているものは、初めてみるように思えても、既知の枠組みからは出ていないのです。大学では無理やりにも色々な本を読んできたことでしょう。その営みをこれからも続けてほしい。未知との出会いを続けてほしい。そのために、もう片方の手に本を持っていてほしいと願うのです。

贈ることば



比較文化学科准教授
内山 史子

“That since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defences of peace must be constructed;”

これは、1945年に採択された「ユネスコ憲章」前文の冒頭です。邦訳では「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と始まります。私はこの言葉に心を掴まれて、大学で国際法を専攻し、途上国における教育の権利の実現について研究しました。ユネスコ憲章前文は、次のように続きます。

“That ignorance of each other’s ways and lives has

been a common cause, throughout the history of mankind, of that suspicion and mistrust between the peoples of the world through which their differences have all too often broken into war;”

比較文化の研究とは、まさに、世界に生きる人々の様々な生活と考え方を理解し、その先に皆が共に生きる方法を探る手段です。異なる価値観や論理を理解することは、楽しくもあるけれど、自己の価値観が揺らぐような体験も迫られます。それでも、そのような経験こそが、心の中に「平和のとりで」を築く道なのだろうと思います。私は卒論を書いた結果、個々の社会の成り立ちに基づいて文化を考えたいと思い、地域研究の道に進み、フィリピン社会史を研究するに至りました。フィリピンを通して、私は、世界そして自己の価値観と向き合っているように思います。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。世界は広く複雑です。都留での勉強が、皆さんがこれから世界と向き合うための力となることを願います。

法人は不断に自分を つくりかえる



大学院文学研究科
社会学地域社会研究専攻
教授 前田 昭彦

少し前にグラットン『ワーク・シフト』（2012年）という本が話題になった。グローバル化、高度情報化が極限に進行する近未来（20年後程度）、どのような働き方をすると人生が幸福になり得るか問う。

結論の一つは数年ごとに自分をつくりかえること。グラットンは「連続スペシャリスト」といい、折にふれ「ジャンルと職種を選び、高度な専門知識と技能を身につけ」ろ。現在の得意分野に安住せず、次々と専門性を拡張、新

分野を勉強して、自分の専門的力量を不断に高めよ、ということだ。一方、管理職などで重用されてきたゼネラリスト（広く浅い知識と技能を蓄える）は、グラットンにだめだという。

まさに法人（企業）では、このようになっている。それが個人にも及ぶ、というのだ。さて、修士の研究で獲得してもらうのは、専門的知見に加え、高度の「一般的」リサーチ能力のはずである。つまり、大学院で積んだ研究実践は、こうしたグラットンの主張に直接つながる。

グラットンの主張はもっともと思うところもあるが、違和感の方が強い。人生、何事も意欲的に取り組み、万事が楽しい時期もあるが、全く逆にひどく落ち込み意欲を失う時期もあるものだ。順風満帆のときはグラットンのいうようにどんどん進めばいい。だけれど辛いときはいったいどうする？

法人だったら清算すればよい。個人だったら？ そんな時はありのままの自分を受け入れる以外なく、それも勇気だ。生身の個人と法人は違う。

旅立つことば

学び合う仲間、先生方との 出会い



初等教育学科4年
堀江佳央

初めて都留市に来て「学生の街」に衝撃を受けたあの日から、もう4年という月日が流れてしまいました。ついこの前、一人暮らしを始めたと思っていたのに、気付けば卒業です。本当にあっという間でした。

この4年を振り返ると、都留でしか味わうことのできなかった充実した学生生活であったと感じています。それは学生が全国から集まる都留文科大学で、教員という同じ夢に向かい互いを高め合う学生同士が学び合う環境であったことが、大変大きかったと考えます。その日々にはいつも私を支えてくれる先輩や仲間、後輩の存在がありました。

大学生活では、サークル活動と卒論のための研究に特に力を注ぎました。サークル活動では、バドミントンサークル OPPI に所属しました。県内外の大会で



サークル仲間で沖縄旅行

優勝するという目標のもと、自分たちでサークルの在り方や練習内容を考え、何度もぶつかり合い、その日々の中でかけがえのない仲間を得ることができました。また3年生になってからは、ゼミで国語教育学を専攻しました。春日由香先生や個性の強い仲間たちと納得のいくまでとことん話し合った時間は、とても濃い時間であったと思います。

こんな都留文での一日一日は、これからの私を創る糧になってくれると確信しています。新しい時代と社会を担う子どもたちに関わることができる教職という仕事に誇りをもち、一つひとつ自分の壁を乗り越えていきたいです。これまで支えてくださった先生方、友人、家族には心から感謝しています。本当にありがとうございました。

『たくさんの 好きが生まれた 4年間』



国文学科4年
田口 優

先日、最後のゼミの授業が、大学生活を五・七・五で表現しようという句会スタイルで行われました。それぞれが句を認める中で、最も得票の多かったものが上記になります。文学部の卒業生が考えたものとしては稚拙に思われるかもしれませんが、こちらの方が想いがより伝わりやすいという気がしています。

この4年間、私にもたくさんの「好き」が生まれました。部活やサークル、アルバイトでもたくさんの仲間にも恵まれ、大学生活の後半のほとんどはゼミ室に入り浸るほどに、勉強面でも友人に支えられたことは一生の思い出です。好きなことを、好きな人たちとともに、好きなだけ学べたこと。これは私のこれからの人生の核を成す財産になります。この4年間の出会いは



4年生ゼミ全員集合！

もちろん、大学で学ばせてくれた家族にも感謝の気持ちを忘れません。

私は来春から、教壇に立ちます。と言ってもいわゆる普通の学校ではなく、N 高等学校という先進的な通信制の私立高校です。そしてなんと、配属が沖縄になるという連絡をいただきました。埼玉県出身の私としては、不安と楽しみが入り混じった心境です。でもきっと、新天地でもたくさんの「好き」と出会えるはずで、全く知らない土地に住み、生まれも育ちも異なる人と親睦を深めた貴重な経験が、きっと活きるはずで、都留で過ごした4年を胸に、これからは教える側として学びに向きあっていきます。

旅立つことば



英文学科4年
田中 亜美

都留に来て、勉強を始めて4年が経ち、卒業の時期になりました。入学した当時は、多くの人に見られるかもしれない文章を自分が書くなんて思ってもいませんでした。

私が都留文科大学を知ったのは、高校時代の恩師に勧められたからです。それまでは、「都留」の文字を目にしたことは一度もなかったし、まさか、自分が遠くまで来ることになるとは思ってもいませんでした。

受験をして、アパートを探して、と準備は進んでいるのに、一人暮らしをしながら勉強している自分の姿が想像できませんでした。しかし、いざ始まるとなんとかできたり、楽しく勉強や部活動に取り組みました。

勉強面で言えば、日本語教育の分野に興味をもったり、英語の文学、言語学に触れたり、さまざまなこと

を勉強しました。部活動では、今までできなかった和楽器に触れ、その奥深さにはまり、活動日で講義以外の時間は和室に行くほどに熱中しました。

私が、まったく知らなかった場所で充実した4年間を過ごせたのは、新しいことを始められ、いい出会いに恵まれたからだと考えています。知らなかった学問、部活動、興味があってもなかなか実践できなかったことなど、たくさんの収穫がありました。教授、先輩、後輩、ゼミや部活動の仲間との出会いも私にとってはとても大きいものでした。すべて、私にとって勉強になったし、刺激になりました。

これからは、都留での学びと出会いに感謝し、さらに頑張っていきたいと思います。



友人と卒業論文執筆中

私の支え



社会学科
現代社会専攻4年
望月 真湖

「わたしたちは見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」これは、私が昔から大事にしている新約聖書の中の言葉です。私の大学生活は、まさに「見えないもの」に目を注ぎ、同時にそれに支えられてきた4年間でした。

私は、都留に住みつつ都内の合奏団体に所属していました。平日は授業を受け、空いた時間に楽器の個人練習をし、週末になると都内に出かけて合奏練習に参加するような毎日でした。そうして勉強の傍ら自分なりに音楽と向き合ってきた私は、見えないものを作ることってなんて難しいのだろうと常に思うようになりました。また同時に、音楽は目には見えないからこそ、時に人々を勇気づけ、優しく包み込み、救うのだな、と感じるようにもなりました。悲しい時も辛い時も、



合奏団体の仲間と

いつも私は音楽に支えられていました。

そんな音楽と同様に、人との繋がりにも支えられた4年間でした。大学の先生方、ゼミの仲間、家族、大好きな友人たちと過ごした日々や繋がりは、目には見えないけれど、私にとって本当に大切なものです。人々との繋がり、学問を通して得た知識、自分の頭で考えたこと、向き合ったもの。それらすべては、目に見えなくても必ず自分の糧となっており、これから歩む人生において心強い味方であると、私は思います。私を支えてくれたすべてに、心から感謝しています。ありがとうございました。

感謝—都留のおかげで今がある—



社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻 4年
星 野 雄 亮

卒業式まで残り2か月を切ったある冬の日、この原稿を書いている。さて、どんな内容を書こうかと思いを巡らせるうちに、4年前、期待と不安を胸に都留文科大学の地に足を踏み入れたことが思い出される。なりたいたいの目指す理想もまるでなかったあの時の私から、もうすぐ社会人として世に出る人間として私は成長できたのだろうか。

環境・コミュニティ創造専攻での学びは私の想像をはるかに超えるものであった。一見何もないように見える文大の周りにも、豊かな自然や様々な動植物が生息できる環境が整っていた。フィールドワークの授業で大学の外に出てそうした環境に触れたり、都留の地に根差して生活されている地元の方々との関わりを持ったりしたことは、私に貴重な経験をさせてもらっただけでなく、将来への道筋をはっきりとつけてくれた。



2018年度 スキー同好会合宿

また、人間関係という点から見てもとても恵まれていたと思う。日本全国から集まった個性豊かな学生たちとの関りは私の大学生活に彩を加えてくれた。サークル活動でも、代表として運営に携わらせていただいたことは私を大いに成長させてくれたと思う。

来年からは市役所職員としてまた新たな一步を踏み出すこととなる。しかし、期待はあれど不安はほとんど感じない。それは間違いなく都留で学んだ4年間があるからだろう。社会人になっても文大での学びや経験を忘れず前に進んでいきたいと思う。4年間、本当にありがとうございました。

友達



比較文化学科 4年
亀 谷 和 花

初めて都留に来た時の正直な感想は、「ヤバい、何もない…」だった。確かにここは私が好きなウィンドーショッピングが気軽に出来る場所ではない。真面目な見た目の学生が多いので、気の合う友達が出来るとも心配だった。

実のところ、私はサークルもすぐに辞めてしまい、部活動もしない4年間を送った。しかし、沢山の良い友達に恵まれ、熱が出たら買い出しに行ってくれたり、夜中に誰かに話を聞いてもらいたいときにすぐに来てくれた。頼れるだけでなく、興味関心が似ている私たちは多岐にわたる話題を深く話し込めた。夜な夜な酒を飲み交わしながら、それぞれの意見を語り合っているとき、文大生になって良かったと感じる。

アメリカに5カ月間協定校留学をした際、現地の



アメリカ留学で出会った友達と京都にて

学生たちと友達になれた。今でも毎日のように連絡を取り、互いの国を歩き来している。それほど友達になれるとは全く期待していなかったが、今では口喧嘩できるほど仲良しだ。語学留学だったが、比較文化学科で学んだ社会的な知識は、現地の文化を理解し、現地の学生と語り合う上で非常に役立ったと感じている。私は異国の友達が多いが、常々英語力だけでは友情や信頼関係は築けないと思っている。信頼関係を築く上で、自分の考えを自信を持って語れる方が、高度な言い回しの英語を話せるよりも100倍大事だ。語学力は後から自然とついてくる。

文大で、比文で、最高の友達と学べたことに感謝しかない。

人の温かさに包まれて



文学専攻科
教育学専攻

林田小葉

四年間都留文科大学で過ごし、卒業後一年間特別支援学校で講師として勤務しました。現場を知ったうえでさらに学びたいという気持ちを持ち、文学専攻科へ入学しました。専攻科の講義は学部講義より少人数で行われることもあり、対話形式でそれぞれの分野について深く学ぶことができました。また、特別支援教育課程の授業をとったり学部生と一緒にゼミに参加させていただいたり多くの学生や先生方と共に学ぶことができ、とても贅沢な一年間を過ごすことができました。

都留には、信頼できる人たちが多くいます。学部生時代からよくしてくださっていた先生方、専攻科にきて出会った先生方。私たちがもつ疑問や悩みにまっす



ゼミの思い出

ぐに向き合ってくれます。そして私たちが嬉しいことには一緒に喜んでくれます。よい意味で先生だから学生だからと大きな線引きをせず、人間味あふれる姿で向き合ってくださる先生方のもとで学部時代から5年間学ぶことができてよかったです。そして、ときにはぶつかりながらも同じ目標に向かって努力し続けた仲間にも出会うことができました。このような出会いで私は一人の人間として大きく成長することができたと思います。これからも人との繋がりを大切に、子どもたちがもつ楽しい！すき！の気持ちを丁寧に育むことができる教師になります。関わってくださった皆様、心から感謝しています。ありがとうございました。

言幸く



大学院
国文学専攻

山岡美咲

平成から、令和へ。期待と高揚と、そして大きな不安を抱えて都留に足を踏み入れたあの春から、6度の季節が巡りました。

学部生としての4年間、学びへの喜びと、新しい知識への興奮とに満ち満ちていました。もっと学びたい、もっと研究してみたい。そんな気持ちを抱えて、友が羽ばたいていくなかももう一度都留文科大学の門を叩き、早2年。大学院において、上代から現代まで、様々な文学作品を研究なされている先生方から丁寧な指導を賜り、自身の知見を、見識を深めることができました。文学や研究に対する真摯な姿勢をも学ばせていただき、場面、場所を問わず、「学び続ける」ことの大切さを再認識いたしました。

また、改めて御礼を申し上げたく、この場をお借りいたします。大学生生活、特に院では、持病の悪化から



保健センターの皆さんと

体調面で困難な状況にありました。そんな折、学部・院と御指導を賜ると同時に、たくさんのご支援とご配慮をくださいました鈴木武晴先生には、感謝の念に堪えません。国文学科の先生方におかれましても、大変なご面倒をおかけしたにも関わらず、あたたかなお言葉とご配慮とをくださいました。深謝申し上げます。さらに、この6年間、どんな時もそっと寄り添って下さった保健センターの皆さま、本当にありがとうございました。

このように、無事に次への一步を踏み出せるのも、先生方、大学院の仲間たち、そして両親の支えがあったからこそです。深く、深く感謝申し上げます。

大学での学び、地元での活動



大学院
社会学地域社会研究専攻
小 俣 溪 和

大学、大学院と都留文科大学で6年間を過ごしました。多くの学生のように都留で一人暮らしをした訳ではなく、地元から電車で通う6年間でした。仲間と離れた生活は少し寂しさもありましたが、地元から通う生活のおかげで、私は大学での学びと合わせて地元での活動にも力を入れることができました。

大学では二つのことに集中して、学生生活を送りました。一つは教員免許の取得を目標に各種学業に臨み、学びを深めること。もう一つは『FIELD・NOTE』編集部員として地域に視点を向け、編集という作業を通して自身を見つめ直すことです。この二つはこれからの人生において必要な力をつける、大きな学びとなりました。



『FIELD・NOTE』での活動の成果

地元での活動も二つのものに力を入れてきました。この二つは、大学での二つの学びに関連するものとなりました。一つは環境教育施設でのボランティア活動です。子どもたちと共に活動するなかで、大学での学びを実践しながら活かすことができました。もう一つは地元の地域活性の団体に所属し、地域を盛り上げるための企画と運営に携わってきたことです。地域に目を向けて活動するという、社会学科と『FIELD・NOTE』での学びを活かしての活動となりました。これらの活動は今後も続けていこうと考えています。

最後になりましたがこの場を借りて、数々の学びを支えてくださいました先生方、活動を支えてくださった皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

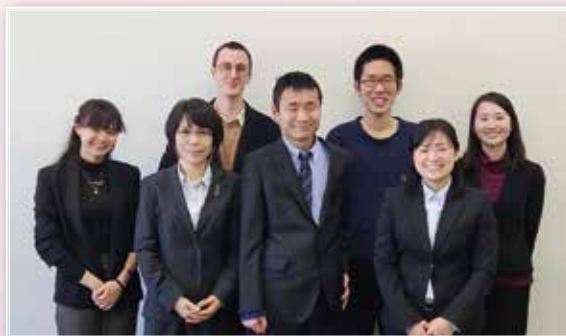
学び直しの大学生生活



大学院
英語英米文学専攻
長谷部夏江

4年前の春、五十路半ばにして教養を高めたく、高校教師を辞めて英文学科に入学した。3年目からは大学院へ進んだ。若い学生たちとの年齢差が心配されたが、「志が同じならやっていける」と一蹴した。案の定、授業どころか3つの英語系サークルにも所属して、志の高い文大生と学び合うことができた。若い学生に沢山助けられ、一方、年の功で私が先生との繋ぎ役を担ったこともあった。

教師を経験して、教師がいかに授業準備に苦心しているかを知っているため、講義は休まず出席し、いつも最前列に陣取った。先生方の熱意ある講義は、私が社会経験や育児経験があるからこそ、よりよく理解できる内容が多かった。新たな知見が広がる一方で、内



英語英米文学 2019 院生達と

省して新たな気づきを得ることもあった。

修士論文の研究では英文学科の全1年生を対象に、語彙文脈学習方略の効果を和文と英文で比較調査した。先行文献を基に研究をデザインしたり、結果を分析したりと、研究の面白さを知ったが、あまりに難解で根気のいる作業に頭を抱えた。苦悩する自身を鼓舞する毎日。指導教官のエバンズ先生からはいつも力強い励ましの言葉を頂いた。

文大の4年間、若い頃とは別人のように真面目に努力することができた。それは丁寧なご指導をくださった先生方、温かくご対応くださった職員の方々、そして共に支え合った学生たちのおかげである。深く感謝を申し上げたい。

これまでの感謝、そして、 これからの決意



大学院
臨床教育実践学専攻
菊地 克哉

2014年春、地元の茨城よりこの都留の地に来てから、あっという間に6年が経ちました。私は、この6年間で、ここでは語り尽くせないくらいたくさんの思い出ができました。特に、学部生の頃から参加し続けていた地域の子どもたちとのアート活動を通して、子どもたちが心から楽しめる活動にするためにはどうすればよいかを、参加学生や担当の先生方と考えたり、様々な「ものづくり」をしながら子どもたちと関わり合ったりした経験は、それら全てが私にとってかけがえのないものになっています。

現在、都留文科大学の卒業生の中で、多くの方々が全国各地の学校で教員としてご活躍されています。私も、卒業後は地元の茨城の小学校で教員として働きます。次に私がこの都留文科大学を訪れる際は、学生・院生という立場ではなくて、教員という立場でここに



楽山から見た大学周辺の風景

帰ってくることになるかと思います。私も、都留文科大学の卒業生として、その名に恥じぬよう、息つく間もないほど忙しいと言われる学校現場の中において、たとえ傷つくことがあったとしても、常に自らの実践を省みることを忘れずに、日々精進していきたいです。最後に、私と共に学び合ったり、くだらない話から真面目な話まで語り合ったりしてくださった学生・院生のみなさん、そして、愛のある言葉で私の背中を押し、温かなまなざしで私を見守ってくださった先生方、今まで私のことを支えていただき本当にありがとうございました。



初等教育学科 令和元年度卒業論文題目

新井 仁ゼミ

- 荒木 雄登 過程を大切にした分数の除法の指導について
—キズネール棒を用いた教材開発—
- 伊澤 美来 子ども自ら小数の計算方法を創りだす指導の在り方
—同数累加から比例の考えによる拡張—
- 梅原 祥平 ボートレースの仕組みと統計を用いた確率に関する研究
—データ分析の可能性—
- 河村 夏希 特異的算数能力障害の児童に向けた指導の在り方について
- 北本 遥花 小学校における分数の指導の在り方について
—分数の立式に焦点を当てて—
- 小林 真子 プログラミング的思考力を育てる小学校算数の指導
- 佐藤 萌子 第5学年の割合における指導の在り方
—系統的な学びに焦点を当てて—
- 高橋 笑子 かけ算の拡張における比例の考え方の役割
- 津田 結花 視覚から考える座席の位置に関する研究
—図形モデルの作成と解釈に焦点を当てて—
- 藤原 里恵 児童自ら問題を発見するための数学的活動の在り方

市原 学ゼミ

- 大賀 光 “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討
- 大塚 優菜 社会的スキルの因子構造
- 越智 大介 浅い関係で用いられるスキルについての研究
- 熊谷 駿希 他人信頼感尺度と恋愛に対する態度尺度
- 小辻 拓実 過程分離手続きによる非意識的共感の抽出
- 高野 友輔 小学校・中学校・高校における心理教育の有効性と認知について
- 富永 恵美 ソーシャルスキルと態度による大学生の友人との付き合い方の分類
- 矢野 日南 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成

内山 美恵子ゼミ

- 荒殿梨歩・永汐 礼 霧島火山新燃岳をモデルとした火山防災教育のための教材研究と授業実践
- 萩原 風彩 都留市田原地区における広葉樹年輪から推定される近年の気候変化
- 前川充歩子・矢代梨花・依田悠生 小学校の立地によって防災教育はどのように変えるべきか
—都市部と山間部の小学校を例として防災マップから見えること—
- 守屋 那菜 富士山須走期スコリアの形態的特徴
—特に R1・R2 スコリアについて—
- 佐々木さくら 富士山についての火山防災教育授業案の作成

岡野 恵司ゼミ

- 田村真奈美 回文数と2進数
- 澤田 周作 連分数と一般化連分数によるeの展開
- 堀江 玲 江戸時代における幾何学
- 伊富貴 翔 $x^2+y^2=p$ となる素数たち

春日 由香ゼミ

- 石谷 実紗 読み聞かせと「選書」
- 佐々木萌佳 音読指導と音読カードの活用
- 鈴木 一成 教室の中における「方言」
- 相馬 涼 国語教室における「ドラマ教育」の検討
- 田崎 遥 小学校漢字指導の研究
—許容の問題を考える—
- 田中真佑美 「質問力」を育てる国語科授業の研究
- 堀江 佳央 小学校における「毛筆」書写授業の現状と方策
- 松住 安奈 国語科授業におけるインクルーシブ教育の検討

加藤 優ゼミ

- 天野 裕太 サッカー選手のポジション別性格特性について
- 岡田 桃子 スポーツ傷害や疾病と心的外傷後成長の関係
- 織部 雄太 運動時における発声の効果についての研究
—方向転換速度に着目して—
- 上浜 千明 シュート成功率が及ぼす勝敗の影響について
—都留文科大学女子バスケットボール部の場合—
- 黒沢 宗広 都留文科大学における運動習慣の実態
—相対年齢効果に着目して—
- 小島 莉奈 運動部活動と運動サークルにおけるスポーツ傷害発生の比較・検討
- 須賀井友洋 都留文科大学グラウンドの人工芝化に向けての研究
- 瀧本菜々子 都留文科大学女子バスケットボール部のゲーム分析
—リバウンド落下位置について—
- 津川 広子 中学生の「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と小学校体育授業との関連性について
- 能村 蓮 運動部活動継続の阻害要因について
- 望月美弥子 小学生の遊びとコミュニケーションスキルとの関係について

瓦林 亜希子ゼミ

- 大野 晴貴 児童の授業の一環としてのビオトープ教育の実践
- 鈴木 彩乃 現代のキャリア教育における職場体験の課題と改善策
—地域や企業とのつながりの重要性—
- 三ノ宮 純 周囲環境による日本の児童の自己肯定感の低さ
—日本教育史から対策を探る—
- 飯村こなみ シュタイナー教育と思想から見る現代の「自由」と「生きる力」
- 谷内田 稔 生活綴方教育における「赤ペン」の重要性及びその指導方法
—津田八洲男実践からみる教師の関わり方—

上原 明子ゼミ

- 鈴木 南実 フィンランドの小学校英語教科書の分析
- 笹原 由香 日本と韓国における小学校英語教育の比較
- 高橋 杏奈 日本の英語教育における小中連携
- 柘植 大和 小学校英語教育におけるICTの活用と課題

長尾はるか 絵本を活用した小学校英語教育
中野 修也 日本語指導が必要な児童生徒受け入れの現状と課題

西村 多史 小学校英語教育における CLIL の意義
森本 翔太 小学校英語教育と国際理解教育
山口 夢乃 小学校英語教育における教員研修

佐藤 隆ゼミ

安慶田佑奈 沖縄の学力向上対策がもたらす矛盾
—沖縄県の子どもたちが抱える問題に向き合ってみて—

蘆田真有美 大学における教師教育教員養成のあり方
片山 真美 “主体的・対話的で深い学び”を生み出す教室

佐々木滉平 肥大化する学校スタンダード
箕浦 亜弥 若者のアイデンティティ形成と現代の高校教育

米田佳那子 キャリア教育の現状と課題
—子どもと社会が出会う学校—

清水 雅彦ゼミ

奥脇 桃花 音楽療法について
—音楽が持つ可能性—

勝山 京香 特別な支援を必要とする子供達への音楽療法

齋藤 沙織 音楽が与える影響
—合唱王国“ふくしま”の視点から—

高山 恵海 クラシック・ポップス音楽を考える
—発声の観点から—

堀内 駿 唱歌・童謡の教育的意義と効果的な実践方法

前野 航平 オーケストラと教育
正岡星濤音 学校教育における合唱
丸子 瑞穂 様々な視点から探る合唱
三石 真奈 BGM の変遷と魅力

十川 菜穂ゼミ

内山未紗紀 サン＝サーンス
—アレグロアパッショナートについて—

大森 廉 組曲「展覧会の絵」について
佐々木美羽 音楽教育の意義
滝谷 太成 音楽と感動
—音楽心理学からみた感動の仕組み—

野地和香奈 音楽が子供に与える影響
—つながり—

前川美智子 現代人を取り巻く音楽の効果
松野 奏 音楽の力
—なぜ、人間は音楽を聴くのか—

盛山 円香 ポピュラー音楽の歌詞から読み解く日本の恋愛・ジェンダー感

平 和香子ゼミ

柳葉 大器 幼保小接続期における食育に関する研究
工藤 雅史 アイヌ文様刺繍を用いた家庭科教育実践
村本 隆史 小学校家庭科教育における食文化に関する現状と課題

林 純菜 特別支援学校における防災教育に関する研究

山田 竜也 巧緻性の向上を目指した被服制作実践に関する研究

須田菜那恵 家庭科を基盤とした防災教育の研究
小針 叶愛 モラルジレンマ教材を用いた防災教育に関する研究

持丸 大 和裁・洋裁技術を活用した被服製作に関する研究

竹下 勝雄ゼミ

今村 祐太 日本の文化であるマンガの多様性について
木村 啓成 図画工作教育における教師と教科のつながりの重要性

西脇 双葉 児童理解のための美術的アプローチ
—学校教育におけるアートの可能性を考える—

萩谷 美帆 風土と色彩の関係性について
藤井 知史 図画工作科指導のあり方の一考察
守屋 博貴 児童画における指導についての一考察
渡邊 真子 図画工作教育における絵の具の指導について

渡辺 由紀 豊かな心を育む美術鑑賞

筒井 潤子ゼミ

柳澤 大地 いじめ指導
～なにをもっていじめ解決というのか～

植竹 美里 暴力をなくすために
～人間の攻撃性から考える～

加藤 誠貴 死に至る病から教育を考える
～人間を死に至らしめるのは細胞か社会か～

高野 未来 発達障害（ADHD）と愛着障害
～それぞれが抱える困難さから支援の在り方を考える～

東城 友香 「虐待の連鎖」を断ち切るために
～実際にあった児童虐待事件を基に考える～

戸栗 里奈 デジタル環境にある日本の子育てについて考える
～乳幼児が通信機器を利用する上で注意すべきこと～

中村 和史 非行少年と「いい子」
～子どもたちが犯罪に手を染めないために～

望月南々子 開かれた子育て
～親としての居場所から子育てを考える～

安田 美佐 「ネガティブ感情」と向き合いながら子どもを援助するということ
～教育・福祉・心理の現場の援助者の声を中心に考えてみる～

堤 英俊ゼミ

雨宮 知宏 読み書きを教えるということ
—識字教育の実践を手がかりに—

井河 美葉 教育の中での絵本づくり
—読み手であり作り手であるために—

西山 真生 ケア的関わり合いと学級づくり
本田あかり スローにつながる場をつくる
—障害者が働くカフェを手がかりに—

本田 美帆 特別支援学校における学びの道筋について
森河真愛子 思いつきが形になる学級づくり
—ダンス活動を通して—

米屋亜沙美 知的障害のある子どもへの教師のはたらきかけ
—教材作りを通して—

堀木 和奈 母子世帯に生きる子どもと学校
—教師にできること、できないこと—

鶴田 清司ゼミ

猪瀬 真凛 明星学園の「みいつけた」から紐解く「子ども」の主体的な学び
大江 正剛 地域教材を活用した道徳の授業づくり
—新学習指導要領の視点から—
佐野 知美 お互いを認め合えるインクルーシブな学級づくり
鈴木 文香 インクルーシブな授業づくりとは
—授業のなかに「再包摂」を生むためには—
本林 風香 謎解き評論文指導で子どもの読み書き能力は向上するか

寺川 宏之ゼミ

中川 俊来 閉曲面の分類
夏目 大 グラフ理論からの話題
～5色問題について～

鳥原 正敏ゼミ

今西 董 主体性を高める授業づくり
—図画工作における正解とは—
小野 純也 表現としての造形から図画工作科を考える
河西 夏希 表現に関する一考察
—言語活動と図画工作を中心に—
角野蒼士郎 図画工作の意義と効果的な学びに関する一考察
小島 恵 情操教育からみる図画工作に関する一考察
鈴木咲亜弥 図画工作を活かした学級作り
—いじめ・不登校を減らすには—
本橋真之介 個性を尊重した教育に関する一考察
—図画工作科の活動と目標をもとに—
山脇 崇政 新教科「てつがく」と図画工作教育の関連に関する一考察

中川 佳子ゼミ

太田裕一郎 無意識的思考理論の再検証
嘉数加奈子 作業時の色彩環境が、心理評価及び作業能力に与える影響
坂井 湊太 外食サービスにおける顧客感動の口コミ分析
佐藤愛実・西塚千秋 遊園地のイメージ構成要素とその形成要因について
本間真純・南 奈緒 色彩とにの組み合わせによる心理的効果

西本 勝美ゼミ

岩田 瑠那 生きづらさの中で共に生きていく
—やまゆり園事件が投げかけたものとは—
奥野 雅統 活気ある地域へ
—高校教育における屋台骨育成—
小宮山奈央 「生き甲斐」のある地域へ
—暮らしを守る自治活動を目指して—
佐藤 珠美 子どもの主体性を尊重する教育とは
—特別支援教育の子ども理解と環境づくり—
長石 尚也 子どもを貧困から守り、育てる地域
—子どもたちにあたりまえの生活を—

平川 太一 子どもが安全に暮らせるまちづくり
—歩行者の事故を回避するために—
横島 憂香 震災復興とは何か
—被災者の現実に向き合う—
三浦 星 地域で育つ子どもたち
—学校を地域住民がつながる場へ—

平野 耕一ゼミ

神崎 風 ダイラタンシーの原理と身近な材料を用いた緩衝材の作成
草野智恵子・篠原由樹 小学生に向けた理科の自由研究の対策授業について
高橋侑希・堤内奈菜子 通常学級における教科横断的な授業とインクルーシブ教育の視点から理科の授業を考える
前川陽平・山本拓海 再生可能エネルギーの課題と身近なもので作る風力発電装置の開発と授業実践
渡邊 佳那 教育現場における高次脳機能障害の合理的な対応の考察

廣田 健ゼミ

国府田 怜 子どもの自然から始まる教育の形
—社会ニーズの教育に対するオルタナティブを問う—
佐藤 拓実 学校における働き方改革の有効性
高木あか音 子どもの主体形成と「学校スタンダード」
中山 菜美 主体性を育む学級づくり
—自治を伴う主体性の形成に注目して—
原山 桃佳 外国人児童の学校への受入れと共生に向けて
—学級担任の視点から—

藤本 恵ゼミ

卯之原愛実 レオ・レオニ『スイミー』の授業案
—劇化を用いた授業がもたらす効果—
大橋 美咲 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』論
—作品からたどる〈ほんとうのさいはひ〉—
掛場 優貴 あまんきみこ「ちいちゃんのかげおくり」の授業構想
—読んで、書いて、戦争を考えよう—
佐藤 優菜 佐野洋子の初期作品から見る思想の深まり
—執着からの解放について—
野中 穂波 新美南吉『手袋を買いに』論
—狐の役割からの考察—
松下 結花 綿矢りさ論
—〈自己の確立〉と〈共感性〉から探る特徴—
吉田 昂平 「注文の多い料理店」の教材価値

別宮 有紀子ゼミ

沖田 連・丸山 真 一号館裏ビオトープ「つるりん」は緑の回廊の役割を果たしているのか
—赤外線カメラを用いた哺乳動物相の調査より—
清水 瑠菜 農薬の有無による水田の生物相の違い
—教科横断型の授業づくりにむけて—
下村 大生 植物の葉の内部構造の多様性に着目した教材研究

- 高杉 莉代 富士山麓野尻草原に生息する土壌動物相
—環境要因とダニの多様性との関係—
- 新田 彩乃 キャンパスにおけるクマムシの個体数とコ
ケ類の関係
—クマムシを活用した教材研究に向けて—
- 渡辺悠真子 セミの抜け殻を活用した教材研究
—児童と共にセミの謎にせまる—
- 菊池 香帆 富士山麓野尻草原に生息する絶滅危惧植物
の保全のための研究
—ヒメシダの侵入は植物の多様性に影響を
与えているのか—

水口 潔ゼミ

- 池山 知佳 女子 200 m におけるレース特性
—都留文科大学陸上競技部女子短距離選手
の場合—
- 嘉数 航河 野球における無死・一死走者三塁時の攻撃の
分析
—沖縄県 S 高校過去のデータより—
- 北本 隼也 日本野球機構における 2 リーグ制導入の要
因について
- 塩貝 知可 主観的運動認識と客観的運動認識の差異が
技術向上に及ぼす影響について
—都留文科大学女子アイスホッケー部ス
ケート未経験者の場合—
- 西内美香子 女子三段跳における助走が跳躍に及ぼす影響
—都留文科大学陸上競技部 M.N の場合—
- 西家久美子 小学校高学年における「よい姿勢」について
の研究
- 平賀 美波 陸上競技のフィールド種目別に見る性格特
性について
—大学競技者を対象に—
- 山内 慶介 高校軟式野球における無死一塁での送りバ
ントの有効性
—秋田県立 N 高校の過去のスコアより—

武蔵 由佳ゼミ

- 朝野 志保 大学生の友人関係について
—自己肯定感・身体満足度・友人関係方略と
の関連について—
- 薄田 朋子 特別の教科道徳および道徳教育の在り方
についての考察
- 金谷健太郎 大学生の活動とキャリア形成
- 長渡 絢香 カラー画像への印象と心理ストレスの因果
関係
- 望月 泰祐 心理的プレッシャーとパフォーマンスの関係
～あがりに関する調査～
- 依田 凜菜 大学生の教育実習における不安と悩みの実
態について
- 渡邉 夏帆 個人志向性や社会志向性と援助規範意識と
の関連
- 結城 玲仰 サイコパシー特性と価値観との関連性の検
討

山崎 隆夫ゼミ

- 穂山 航輝 学級における子どもたちの居場所づくり
- 片岡 拓渡 個の成長を支える学級づくり
- 佐藤 美紀 授業内における学習意欲向上のための手立
てについて
—子どもたちの豊かな学びを目指して—

- 住 菜々子 現在の生きづらさを抱える子どもとその再
生
—援助者の視点から—
- 宮崎 千種 不適切な養育（マルトリートメント）を受け
た子どもたちとその支援

山森 美穂ゼミ

- 山口 諒 小学校理科における粒子を意識する学習指
導の工夫
—「もののとけ方」を中心に—
- 朝比奈拓海 プログラミング的思考の育成を意識した小
学校理科授業
- 旧井 佑樹 日本の小中学校環境教育における課題と可
能性
- 根石 康暉 鉛蓄電池をつくる実験を通した小 6 理科「電
気の利用」の理解深化
- 山根 北斗 界面活性剤の学習を通した小学校理科「もの
のとけ方」の理解の深化
- 流王 和 小学校理科「水の三態変化」における実験手
法の改善及び実験教材の開発

柳 宏ゼミ

- 安藤 翼 大学生の運動生活調査に関する研究
—都留文科大学学生の場合—
- 奥野桃子・早川麻里 バレーボール競技のブロックアウトスパイ
クに関する研究
—関東大学男女バレーボールリーグの場合—
- 佐々木奏織 バレーボールのレセプション技術にかかわ
る要因についての研究
—輪車技術の学習について—
- 永井 真由 映像によるフィードバックを用いて—
- 船田 純香 メンバーが求めるバレーボールチーム像に
関する研究
—スポーツ環境に着目して—
- 山田 佑真 「競争不安」と「学習不安」に関する研究
—バレーボール部員の場合—
- 弓田 真央 本学女子バレーボール部におけるレシーブ
評価と競技結果との関係について

国文学科 令和元年度卒業論文題目

上代文学

- 鈴木 武晴ゼミ
- 赤松 優香 スサノヲのキャラクター
—近代文学における享受—
- 石川 愛華 古事記における黄泉国と根堅州国の関係
- 大津樹莉香 上代文学にあらわれる蛇
- 小野田亜実 万葉集の夏草
- 金子 佳矢 意吉麻呂と国語教科書
- 川端 留偉 ヤマトタケル物語から見る古代の英雄観
- 北澤 小春 『日本霊異記』における動物報恩譚
- 久野 智寛 上代文学から考察する温浴文化
- 興石 藍那 上代における大嘗祭
- 里 優駿 『万葉集』における「はなかつみ」
- 鈴木 千紘 上代の月神信仰
- 吉尾 仁司 日本霊異記と仏教
- 米山 修平 『万葉集』第一五〇〇番歌の考察

中古文学

- 長瀬 由美ゼミ
- 岩波 佳歩 『伊勢物語』における女性の色好み
- 榎本ゆり子 『源氏物語』の囲碁
- 大久保和子 『源氏物語』葵上像の再検討
—歌詠まね姫君の胸中—
- 大里 綾子 『源氏物語』における「なまめかし」
- 木田あかね 『落窪物語』における道頼の人物像
- 吉良茉莉子 『源氏物語』の「御覧ず」と「見たまふ」
- 関本 麻由 『源氏物語』末摘花の役割と意義
- 中村 光 近代以前の日本の同性愛表現
—藤原頼長『台記』を中心に—
- 船橋 風音 平安時代の元号と改元について
- 丸山 風樹 『枕草子』の植物に見る清少納言の感性
- 矢久保空海 『源氏物語』紫の上と明石の君の関係

中世文学

- 佐藤 明浩ゼミ
- 相道 花織 和歌における「萩の上風」の詠まれ方
- 東 あかり 八代集における「菊」の詠まれ方
- 江川 遥輝 山岳を詠む和歌
- 江夏 愛美 『浦島太郎』の考察
- 中村 和也 藤原定家『拾遺愚草』における梅のにほひ
- 埜村 優介 式子内親王の夢の歌について
- 羽土 晃平 『土佐日記』をどのように読み、どのように伝えるか
- 森川 朋香 京極為兼論
—一心と古歌—
- 八鍬沙也夏 中世和歌における「あと」と「すゑ」について
- 屋代 堯帆 歌枕「水無瀬」について
- 矢澤 香凜 歌語「蓬生」考

近世文学

- 加藤 敦子ゼミ
- 大堀 綾乃 『一谷嫩軍記』三段目「熊谷陣屋」の登場しない敦盛
- 孝橋 俊介 『椿説弓張月』の狼と猿の死に現れる勧善懲悪について
- 佐々木瑞樹 『御存商売物』における赤本・黒本
- 松崎みなみ 『ひらかな盛衰記』に描かれる女性達

近代文学

- 古川 裕佳ゼミ
- 楠木 夏菜 佐藤春夫「女誠扇綺譚」論
- 岩本麻友子 梶井基次郎『櫻の樹の下には』論
- 金田 胤也 芥川龍之介「鼻」論
- 川井清穂珠 三島由紀夫『英霊の聲』論
- 杉本 祐紀 遠藤周作「女の一生 二部・サチ子の場合」論
- 田村 海 宇野千代「おはん」論
- 藤田 庸子 川端康成「名人」論

近代文学

- 吉田 遼人ゼミ
- 加藤 雅子 岡本かの子「老妓抄」論
—語りを超えていく「いのち」—
- 佐々木 瞭 「Kの昇天—或はKの溺死」論
—「影」を中心とする物語の二重性—
- 柴田 和明 芥川龍之介「地獄変」論
—作家の果敢—
- 瀬尾 芽生 芥川龍之介「アグニの神」論
—作品に内在するエゴイズム—
- 千明 奏太 江戸川乱歩「陰獣」論
—一名—
- 寺田 美咲 江戸川乱歩『パノラマ島綺譚』論
—乱歩の夢想した理想郷—
- 鳥塚 柚季 小川未明「港に着いた黒んぼ」論
—ただそこにある自由—
- 中川 礼美 太宰治「魚服記」論
—少女の「生」の行方—
- 中山 優花 芥川龍之介「芋粥」論
—弱者の夢、強者の欲—
- 野中さくら 田山花袋「少女病」論
—あくがれの終着駅—
- 兵頭 輝 有島武郎「実験室」論
—解剖がもたらす崩壊—
- 我妻 瑞香 三島由紀夫「花ざかりの森」論
—「わたし」の萌芽—

近代文学

- 田口 麻奈ゼミ
- 柴田 侑吾 森見登美彦『ペンギン・ハイウェイ』に見るSFのかたち
- 稲葉 雄大 東野圭吾『赤い指』論
—愛情の回帰がもたらす結末—
- 後藤 永 『時をかける少女』における少年少女像と未成熟性
—筒井康隆と細田守を比較して—
- 志村 友美 川端康成『死体紹介人』の構造
—語り手「私」が読者へ与える影響を中心に—
- 末廣 雄一 現代のメイド譚
—現代小説における秋葉原およびメイド表象について—
- 中島 亜美 梨木香歩『裏庭』における家族観と「死」について
- 成澤 昇陽 西尾維新『化物語』から見るオタク文化と「萌え」について
- 西川 紗音 児童監禁小説という観点から見た小川洋子『琥珀のまたたき』の倫理性について

萩川 明音 有川浩『図書館戦争』論
—エンタメ小説の可能性—
藤山望仁香 遠藤周作「悲しみの歌」論
—弱き日本人に向けられた祈りの眼差し—
古屋優希奈 江戸川乱歩論
—作品の変遷から見る男同士の絆—
山口茉莉子 天童荒太『悼む人』論
—「家族」と「救済者」の表象を中心に—
渡辺 咲 吉田修一『横道世之介』論
—世之介は「希望」の存在か—

近代文学 有光 隆司ゼミ

池田 健介 国語教育の中の夏目漱石「こころ」
伊集院愛夏 「坂の上の雲」にみる司馬遼太郎の朝鮮観
今井信太郎 夏目漱石作品が教材定番化した起源及びそ
れが維持され続けている要因について
小川 瑞樹 『道草』における健三の生きづらさ
杉浦 茜 武者小路実篤における個人と人類
目時 明里 江戸川乱歩の人形観
—「人でなしの恋」を視座として—
橋本 真実 川端康成『山の音』論
—家族論として—

古代語 加藤 浩司ゼミ

天野 佑亮 接続詞「そもそも」について
石橋 桃佳 「あに」を表す古代語について
小川 夏希 動詞「まうす」の漢字表記の変遷
佐藤たりほ 『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説
話における表現差
佐野凜太郎 現在日本語化した漢語における意味の変容
鈴木 杏奈 接続詞「しかも」の中古から近世における逆
接用法について
千川原 葵 非情主の受け身文について
羽田野梨花 「言う」の謙譲語「聞こゆ」の変遷について
飛野明日香 「咎」の語源及び類義語「罪」「罰」の比較
藤田 真澄 『万葉集』における色名について
星川紗里佳 程度副詞から見た和文特有語と漢文訓読特
有語の位相について
宮田 朋加 『毘沙門堂本古今集注』における濁音表記に
ついて
村山 尚生 『仮名貞観政要』における撥音便について

近代語 中川 秀太ゼミ

村田 天翔 「数日前」を表す単語の比較と考察
阿久津幸汰 山梨県方言に対する意識
柏木 美咲 「青」と「緑」から見る色彩語
志村 祐莉 カレーに関する語彙の研究
菅 茉耶 国語教育の文法指導に対する批判的考察
菅原 七瀬 送り仮名の書き分けによる意味の差と意識
須田 琴乃 企業の用いる謝罪表現の研究
田草川里沙 新語・流行語の定着について
竹花 知紘 Youtuber HIKAKIN における「やばい」の
諸相
中嶋 景香 歌詞中にある「たばこ」がもたらす表現効果
と変化
林 優悟 分割地名の駅名利用について
平田 涼子 香りを表現する言葉について

松本 大我 都留文科大学の大学生に見る方言の衰退

漢文 寺門 日出男ゼミ

市川 智尋 謝靈運詩における「情」について
猪野 真由 陶淵明と孟浩然
—その心情表現を中心に—
大塚 祐奈 韓愈の人間観
尾崎 春華 李白詩における花について
佐藤みなみ 中国古典小説における怪異譚
竹川 風絵 韓愈の左遷時の詩について
知見 竜喜 陶淵明の死生観
中西 恒太 夏目漱石と正岡子規の漢詩における色彩語
について
中村 文音 伊藤仁斎の人間観
三森 佳奈 荻生徂徠『莊子国字解』について

国語教育 野中 潤ゼミ

阿久津 望 あいみよんの歌詞研究
佐藤 千裕 フィンランド・メソッドを取り入れた日本の
小学校国語科の可能性
新町 裕花 大村はまの実践を教育 ICT によって次世代
につなげるための大村はま論
田口 優・丸山萌花 読書感想文の新たな可能性
—論理国語についての考察—
千葉 航介 —これからの国語—
野牛 奏江 川上弘美「離さない」における桜
橋本夢津実 国語科教育における宮沢賢治
—「永訣の朝」を中心に—
藤井ふた葉 新しい時代の全日制普通科における国語科

日本文化 菊池 有希ゼミ

天野 里香 坪内逍遙のシェイクスピア理解
—『テンペスト』を中心に—
菅野 支帆 宮沢賢治作品の母親像について
須藤きひろ 鈴木三重吉によるチェーホフ作品の再話の方法
—「病院」「てがみ」「子守っ子」の三作品を
中心に—
今井 晴美 宮沢賢治作品におけるメーテルリンク『青い
鳥』受容
—「十力の金剛石」「かしはばやしの夜」「銀
河鉄道の夜」を中心に—
小笠原杏華 円地文子による『源氏物語』受容
—『女坂』『女面』を中心に—
片岡 知啓 北村透谷の「牢獄」表象
—バイロンの『シヨンの囚人』との比較を中
心に—
勝田華葉子 生き続ける詩
—中勘助の創作観
鈴木 佑梨 坂口安吾の文化論
—「土の中からの話」「地方文化の確立につ
いて」「続墮落論」を中心に—
外内 千蒔 新見南吉童話の独自性
—オスカー・ワイルド「わがままな大男」と
の関連を中心に—
中野みなみ 室生犀星『蜜のあわれ』映画化の特徴

松下 夕夏	太宰治作品における『ハムレット』受容 —『新ハムレット』を中心に—
水野 史翔	小泉八雲『耳なし芳一』における再話の方法
宮木 貴子	宮沢賢治作品におけるベートーヴェン《交響 曲第五番：運命》受容
百瀬 史葉	『月に吠える』に見る萩原朔太郎の写真的イ メージ
森本 楓佳	宮沢賢治作品における天体の表象 —『よだかの星』を中心に—
八子 澄鈴	島崎藤村の童話作品の研究



英文学科 令和元年度卒業論文題目

大平 栄子ゼミ

- 山崎 有香 *Pride and Prejudice* と自由な女を描く英米の物語 —結婚に縛られる女(男)たち—
- 今泉 錦 アメリカ女性誌 *VOGUE* からみる時代とともに移り変わるファッションと女性像
- 上田 晃穂 *Water* からみるインドのジェンダー観
- 大西 樹里 Riot Grrrl からみるロック音楽と女性の関わり
- 大野 文香 女性差別のカウンターナラティブにおけるディストピア小説
— *The Handmaid's Tale* と *The POWER* —
- 小川 杏子 *The Handmaid's Tale* にみる生殖における女性の権利
- 兼山菜佑子 *Slumdog Millionaire* からみるインドのスラムに生きる人々
- 軽井沢早織 *The Price of Salt* と *Carol* から見るレズビアン表象
- 黒田実咲喜 *Tangled*・*Aladdin*・*Mulan* からみる鏡の表象
- 笹森 茉鈴 *Padman* から見る月経の共通認識と課題及び社会的男女平等
- 鈴木 りん *Padman* から見る女性の生理事情
— 日印比較 —
- 萩原 千尋 *Bend It Like Beckham* と *A League of Their Own* にみるスポーツ界における女性差別
- 前川 夏帆 *The Awakening* から見る結婚における女性問題と結末が示す意義

加藤 めぐみゼミ

- 味戸 有紀 『くまのパディントン』に見る移民と児童の表現
- 伊藤 浩平 *Never Let Me Go* を活用した高校英語授業案
— 原作・翻訳・映画
- 大森ともな シェイクスピアの女性観
- 奥 桃子 『ブリジット・ジョーンズの日記』に表れる現代女性の結婚観・仕事観
- 片野くるみ *The Hours*
— 「苦しみ」との対峙と「生きる」という選択
- 久保 芹佳 戦う女たち
— ジブリ・ディズニー・『プリキュア』
- 田中 夕香 George Orwell は *Nineteen Eighty-Four* をなぜ書いたか
- 手塚 大夢 *Gulliver's Travels* に見られる風刺と映像化作品の比較
- 戸板 みゆ *Pride and Prejudice* にみる Jane Austen の結婚観
- 鳥山 悦宏 映画『ハンニバル』におけるカニバリズム
- 開本 梓輔 カズオ・イシグロの作品からみられる日本とイギリス

竹島 達也ゼミ

- 丹 莉子 *THE HEIDI CHRONICLES* と *UNCOMMON WOMEN AND OTHERS* から見る女性の生き方と選択
- 井上 陽裕 David Rade 「ヴェトナム三部作」にみるアメリカ社会の不条理
- 菊地 綺音 現代アメリカ演劇から見る自我と社会との葛藤
— *THE HAIRY APE* と *SWEAT* からの考察

- 小峯裕里奈 *August: Osage County* から見るアメリカ文化と家族劇
- 佐々木靖乃 *West Side Story* と *In the Heights* から見るマンハッタンに移民
- 関 涼花 *The Adding Machine* と *Dear Evan Hansen* からみるテクノロジーの発展と人間への影響
- 原 るい *Take Me Out* と *That Championship Season* からみるアメリカの社会的少数派の在り方
- 日高 来実 *Angels in America* からみる 1980 年代を生きるゲイの苦悩と希望
- 平松大悟朗 現代アメリカ演劇における女性像の変遷
- 前田 耕汰 アフリカ系アメリカ人と MLB
— 減少の背景と今後の展望 —
- 前林 綾香 August Wilson の 3 作品 *Joe Turner's Come and Gone*, *Fences*, *Radio Golf* から見る黒人文化について
- 本村 慧 アメリカ社会で忘れられた者たち
— *Sweat* と *Cost of Living* から見える闇と希望
- 山本 千賀 “The Color Purple” と “Ruined” に見る差別社会と人びとの自立

儀部 直樹ゼミ

- 小堀 星矢 戦争文学
- 杉谷 大夢 ミッチ・アルボム論
- 阿部 泉水 巡り合いの中で生きがいを見出す
- 乾 友香 エドワード・ゴーリーの作品から見る死生観
- 井上 明紀 Multiculturalism in American Literature
- 岩田実奈穂 ミッチ・アルボムの作品における死生観
- 奥野 春香 4 人の「小さな女性」とアメリカ
— 『若草物語』論 —
- 柏原 愛 ドラマ『ルーツ』が描く黒人奴隷制度
— クンタ・キンテの生き方から —
- 菅谷 美月 ディズニープリンセスの女性としての在り方の変容
- 杉本 雄大 ミッチ・アルボム作品の中にみる死生観
- 鈴木 翔悟 文学における死生観
- 玉置 翔 アメリカ文学から解き明かす死生観創造のヒント
- 仁口ひかり ミッチ・アルボムの作品から見る「死」について
- 林 美愛 アメリカドラマ “Sex and the City” と現代女性
- 番匠 美友 ミッチ・アルボムの死生観
- 福田 美桜 ミッチ・アルボムの有名作品と最新作から見る死生観
- 前田奈々子 ミッチ・アルボムの作品から見る死生観

鷲 直仁ゼミ

- ロブソン麗奈 ウィリアム・モリスのデザインとケルト文様との類似性に関する考察
— 「島の写本」との比較という視点から —
- 今別府 健 ことわざから見る日英比較研究 Japanese and English proverbs
- 小笠原 香 バロック絵画における西洋の宗教観
- 小佐野萌花 肖像画について
- 木舩羽弥香 宗教画における時代背景の比較
- 國米 駿輝 19 世紀の画家 絵画から読み取るロセッティの人生

齋藤 登	ゴンドワナ型神話とローラシア型神話の比較と意義の考察
鈴木 小夏	アート映画の分析とそれが及ぼす観客への効果
鷹野 雪菜	ファン・ゴッホ作『タンギー爺さんの肖像』における考察
宝田彩優里	西洋美術と日本美術について
中野 航平	ロックンロールからロックへ—反抗の若者文化
樋元 なな	サロメからみるファム・ファタール—悪女サロメはどう作られたのか—
原田 奈々	ウィリアム・モリスの生涯と影響力
前田 真歩	サロメ受容における 19 世紀イギリスとフランス比較
山本 祥子	ファム ファタールと女性を描いた画家たち

中地 幸ゼミ

渡邊 華	Good and Evil in <i>The Crucible</i> by Arthur Miller
衛藤 理子	Octavia Estelle Butler の <i>Kindred</i> における人種差別とぎずな
渡邊 響	パッシングにおける黒人の苦悩と葛藤

Hywel Evans ゼミ

杼原 和希	Popular Mythology and the Monomyth
小松山 駿	Rhythm and Rhyme in Japanese and Western Music
鈴木 渉	Relationship between Music and Recording Medium
知念裕里菜	An Analysis of Change in Word Usage—なぜ人々の使うことばは変化するのか—
土屋 結香	Hospitality as the symbol of Japan—日本の象徴であるホスピタリティについて—
中島 淳智	Why is Hawaii “the Paradise” for Japanese?
野崎真里奈	Comparison of Acquisition between Infants and Aphasics
本田 愛佳	The Place of Magic in Ghibli and Disney Animation with Reference to Religion and Ideas
三浦 玄	Role of the Superheroes in Modern Society
宮下 萌美	Cultural Influence on Traditional Clothes
村尾 藍	Relationship between Language and Personality
渡邊 佑衣	English Vowel Perception for Japanese Learners
門嶋英美子	Paraphrase Makes Differences

福島 佐江子ゼミ

鯉坂 司	異文化間語用論に関する一考察
柘植 和也	ポライトネス理論に関する一考察
伊藤 華那	異文化間語用論に関する一考察：日英の依頼表現比較から
伊藤 沙紀	ポライトネスの観点から見る断り表現
太田 紫苑	ポライトネスとラポールマネジメント：職場におけるコミュニケーションの観点から
小池 詠太	ポライトネス理論の一考察：より良い人間関係の構築の為に
佐野 兼央	ポライトネスとラポールマネジメントに関する一考察：米大統領選挙受諾演説を題材に
宮下 理沙	語用論的能力に関する一考察：依頼発話行為を中心に

Kolawole Olagboyega ゼミ

工藤 実紅	The differences between American English and British English
篠原 美咲	English Accents of Japanese Students—A Study On Improving English Speaking In Japan—
橋本 沙紀	The Importance of Phonics in English Education of Elementary School Students in Japan
田島 清香	Gender differences in linguistic expressions
田中 亜美	Second Language Acquisition—A Study of Effective Approaches to Second Language Acquisition and Learning—
平林 壮太	Cultural Stereotypes (How subcultures become mainstream culture)
松田 和也	Methods for Improving Conversation Skills of English Students in Japan
村松 航平	—Politeness— A Study of the Degree of Politeness by the Japanese Learners of English

三浦 幸子／佐藤 明彦ゼミ

井川 茉優	The Critical Period Hypothesis in Second Language Acquisition
池田 飛鳥	The Effect of Readability on Activation of False Schemata
白田 朋未	欧米におけるキャラクターとしての熊の解釈と特徴付けに関する一考察
内田 りん	Analyzing Oral Corrective Feedback in English Classrooms: Focusing on Teachers' Recasts and Learners' Self-Repair
大坪 愛依	The Roles of Color Association and Cross-Cultural Understanding
笠原 百華	The Comparison of English Tests Between the Existing National Center Test and the Subsequent One from the Perspective of Testing Analysis
河野 隼士	The Analysis of Written Corrective Feedback: Focusing on Intermediate Level English Learners
佐々木裕誠	The Effects of Improvisation and the Roles of English Teachers in Presentation
鈴木 宏昌	Corrective Feedback for EFL Learners to Repair Erroneous Utterances
高橋 楽々	Analyzing the Effect of Learning English Vocabulary with Pair Work Activity
照井 紀久	An Investigation of Factors Which Affect JLEs' Phonological Intelligibility: Through the Comparison of Retelling and Reading Aloud
宮澤 真奈	The Effectiveness of Written Corrective Feedback by English Teacher: From the Perspective of the Variation and the Case of Use

Hamish Gillies ゼミ

島田 梨早	The Border of Anxiety Between L2 Speaking and Schizophrenia
荻野 皓海	Possibilities of Virtual Reality Application for Treating Depression in Japan

石川 晴登	The Life Plan as a Professional E-Sports Player: Is it Possible to Make a Life as a Professional E-Sports Player?
窪川みかげ	Investigating Effects of Study Abroad on Japanese Students' Willingness to Communicate: A Narrative Case Study
菅谷 奈菜	The Relationship Between Motivation and Outcomes of Japanese EFL Learners in terms of L2 Phonology
井上 潤紀	The Effects of Classical Music on Diversity of English
浦野 茜	Language Transfer of Japanese Accent and Intonation by Foreign Learners: Suggesting Teaching Methods
大藤 由希	Differences Between Kansai Dialect and Standard Japanese: Focusing on Identity
長田 真依	The Relationship Between Second Language Acquisition and Learning Strategies
関谷 一郎	Britishness of Spoken English by L1 Japanese Speakers: Cross-Linguistic Influence of Japanese Loanwords on L2 English
高野 智史	The Relationship Between Self-efficacy and Listening and Reading Achievement on TOEIC: The Case of College EFL Students
橋詰 彩佳	Investigating the Effect of Studying Abroad: an Autobiographical Case Study
山中 星七	Issues of One-to-One Japanese Teaching to an Italian Student
矢口 岳	EFL Teacher's Perception of Using ICT in the Class: Focusing on Trainee Teachers

社会学科 令和元年度卒業論文題目

現代社会専攻

現代史 菊池 信輝ゼミ

- 古田ひとみ 日本における公娯について
～制度と認識の変容～
- 一瀬佳乃加 韓国・日本の歴史認識のズレの発生原因と影響
- 大木 優介 ゆとり教育に意味はあったのか
～当時の社会背景と現代のアクティブラーニングを関連づけて～
- 長田 愛以 山梨県労働史に関する戦前と戦後
鹿野 純菜 昭和と平成
～2人の「象徴天皇」～
- 功刀 奈緒 日米の大衆文化における核描写と核意識の変化
- 佐野 哲平 日米地位協定に正当性はあるのか
～その成立過程から見る～
- 田原 和樹 日本が空母を持つ軍事的・政治的意味
～空母史からみる変遷とこれから～
- 中村 匠杜 中国自動車産業とEV革命
日高 大器 アジア・太平洋戦争開戦に国内世論が与えた影響
- 福泉春太郎 戦後日本の賠償問題と日本社会
細谷 拓史 南京事件の被害者
宮田 一也 リジェンドルの覚書が台湾出兵に与えた影響
榎本 寅吉 「安倍一強」の実像

社会哲学 黒崎 剛ゼミ

- 青山 将大 青年期における社会性の変容とそれにと
なう自己形成の成功と失敗をかんがえる
小澤 卓朗 アクティブ・ラーニングの特徴と課題
岩田 拓也 同性婚容認をめぐる是非
岡部 佑紀 功利主義とリバタリアニズムの相違性
高鷹 宜輝 戦争・紛争の撲滅と防止についての考察
佐野 光矢 AIに関する法や倫理についての考察
嶋貫 翔 共産主義の可能性
田子 拓基 ヘーゲルの刑罰論における死刑制度の存立
意義
田中 大尊 安楽死を考える
——日本人女性の安楽死をもとに
田中 萌々 ヨーロッパのムスリム移民問題
——イギリスとフランスを中心に
沼倉 康太 新自由主義はなぜ起こったのか
——歴史的アプローチから読み解く
劉 之洋 1916年イースター蜂起に対する社会主義視
点からの再考
——Connollyismとアイルランドにおける社
会主義の「展開」(0)
渡邊 一磨 日本国における死刑制度の存在意義と将来
性について

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 岸本涼太郎 発達障害を巡る23区内の行政施策
天野 樹音 博学連携における学芸員の役割
石森 優斗 東日本大震災・津波被災地におけるコミュニ
ティの流動性

- 木内 寛太 生涯学習としての英語：成人が英語を学ぶ動
機と意義
木下 哲平 精神障がい者を親にもつ人々への支援
黒川 雅真 文化政策は伝統と生活をどのように位置づ
けてきたか
島田 樹 若者のソーシャル・ネットワーキング・サー
ビスにおける情報モラルの創造
高橋 将貴 中学校社会科歴史教科書・高等学校地理歴史
科日本史教科書で描かれる子ども
田崎 諒 考現学の実践とその分析
辻 萌恵真 学芸員養成の現状と課題
徳永峻太郎 大学生の地元志向が及ぼす就職活動への影
響
中田 航平 発達障がいを抱える子どもの自立に向けた
政策の展開
西山 未尋 大人はどのように音楽を学ぶのか
正木 僚 社会教育・生涯学習における当事者と非当事
者の関係
山下 航 給特法にかかわる議論の過程
曾我部慎平 大学生の自主性によって行われる運動部活
動がリーダーシップ獲得に与える影響
関 南美 中学校学習指導要領における情報モラル教
育の変遷と位置づけ

企業経営・労働とジェンダー 野畑真理子ゼミ

- 権 原模 韓国における青年失業の現状と諸要因
張 瑩 中国大学生の就職困難に関する問題分析
熊田 遥 男性における育児休業取得率低迷の背景
栗原 棕 日本で就労する外国人労働者の現状
小林 亮斗 子どもの貧困
——貧困による教育格差
崎浜 大知 日本労働社会のディーセントワーク
～正規雇用・非正規雇用の格差是正に向けて～
杉村 駿太 新卒一括採用システムのあり方に関する研究
——成り立ちの歴史と職務別採用から考察
する
中島 黎一 働くシングルマザーに求められる就労支援
の在り方
西川 咲耶 家事育児関連時間の男女間格差
——「意識」からみる課題
平岡摩梨菜 日本の家事労働の現状と性別役割分業の歴史
牧野 未季 奨学金問題
——日本学生支援機構に着目して——
山口 祐佳 女性のキャリア形成に影響を与える諸要因
吉澤 尚人 ブラック企業における労働の実態
渡邊 幹 学校教員の労働環境に関する研究
～部活動に着目して～

日本経済論 林 公則ゼミ

- 李 柔雅 韓国社会の二極化問題とその解決策
加藤 陸 NHKから国民を守る党への支持拡大に見る
日本政治の変容
佐藤 陽介 廃校の民間活用
柴田 和佳 共感・共有の時代のソーシャルメディアの可
能性
太楽 拓己 CCRCの成功のために

千坂 趙史 環境保全型農業の実践による米のブランド化を中心とした世界農業遺産の活用方法について

中居 竜汰 学校外教育バウチャーの可能性

中島 紅音 男女平等と夫婦の姓

林 倫子 YouTube から見るこれからの広告・宣伝

布施谷紘幸 外国人労働者受入と地域共生社会

松本ちひろ 原発周辺関係市町村および福島県内外における原発問題学習の実態

憲法 浜田 豊ゼミ

加藤 歩葵 財政再建と幼児教育無償化の両立可能性

野田 紗良 生活保護制度の歴史と問題点

環境法 小島 恵ゼミ

根岸 実希 エネルギーの歴史から見る、再生可能エネルギーの必要性と課題

青柳 千咲 適応策の普及と気候変動に対する認識向上による防災
—山梨県の適応策を例として—

安達 元 外来生物の問題とその駆除による生物多様性の保護・対策

石田 陸 日本における戦略的環境アセスメントの制度化と住民参加の課題

佐藤 哲徳 秋田県の地域振興に向けての観光による取り組みを考える

六戸 孝平 海洋プラスチックごみ削減の課題と世界各国の取り組みについて

清水 敬太 山岳資源の利用に関する現在の課題と持続的な有効利用の方策

田村 仁人 地方自治体における避難計画、ハザードマップの課題と有効的な改善、周知について

名取 拳斗 環境教育の展望
—電力小売自由化を例に—

平塚憲太郎 秋田の風力発電によるエネルギー地産地消を目指して

望月 真湖 農山村における生物多様性の経済評価とその活用について

森下 拓海 日本の林業再生に向けて

渡邊 瑞己 静岡県バイオマス利活用の現状と今後の展望

現代政治論 進藤 兵ゼミ

赤嶺 政弥 子どもの貧困に対する自治体支援の在り方
—沖縄県南風原町を事例に—

勝俣 秀斗 地方移住促進のための施策
—山梨県と長野県を例に—

久保田拓海 銭湯の可能性
—地域コミュニティの観点から見た銭湯—

田中 新 空き家問題対策の今後のあり方
—空き家の有効活用注目して—

深町 隆成 音楽フェスの社会的存在意義と将来像について
—フジロックを事例に—

山田 崇人 群馬県の地域経済の現在と未来
—製造業を中心に考察する—

凌 広 地域包括ケアについて
—柏市を事例に—

公共政策論 高橋 洋ゼミ

在原ももか 訪日促進政策における消費単価の増大要因の分析
—自治体の取り組みを事例に—

伊藤 幹久 エネルギー基本計画からみる日本の再生可能エネルギー
—過去の変更点から見る政策の現状—

小田切瑞生 自治体における政策形成過程への若者参加
—若者会議に注目して—

菅野 千歳 自治体における幸福度指標導入の動き
—自治体間の連携の視点から—

小泉 篤広 内発的発展論と地域
—長野県阿智村・北海道下川町・山梨県大月市を事例に—

宮宅浩太郎 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会における予算の推移
—当初予算からの高騰の原因—

若原 貴範 内閣人事局設置による官僚人事への政治介入の実態
—制度化されたキャリアパスの変化—

鈴木 翔 東日本大震災の震災遺構の保存過程における宮城県の役割
—宮城県震災遺構有識者会議を中心に—

伊藤 駿 太陽光発電の立地に対する規制条例
—基礎自治体の取り組みの比較—

環境・コミュニティ創造専攻

環境社会学 神長 唯ゼミ

伊藤 菜香 富士河口湖町が抱える観光・交通問題

江利そらむ 山梨県における狩猟活動維持に向けての考察

小橋 萌 生活者から見る観光地
—高尾山の魅力に関する意識調査より

下山みなみ 「新しいエネルギー」を包摂する社会構造の必要性
—伊豆高原メガソーラー開発計画を事例に—

曾根 春花 山梨県南アルプス市空き家バンク制度のあり方を探る

張 夢 上海で始まった「強制ごみ分別」のもつ可能性

千賀 海聖 コンビニエンスストアと食品廃棄問題
—商慣習と値引き販売が及ぼす影響—

田中 瑠奈 岩手県遠野市における地域の特性を活かしたまちづくり

環境教育学 高田 研ゼミ

笠本 彩加 平成30年7月豪雨における矢掛町の現状と今後に向けた考察

洪 婉 婷 中国における環境教育の現状及び問題点
—地元の大連を例として

佐藤 琢磨 湿地からの「学び」とは何か？
—国内のラムサール条約登録湿地を事例にした現状と課題—

杉村 更紗	人口減少社会における森林環境教育としての の木の意義と課題 —北海道旭川市を例に—
田山 志織	なぜ、茨城県において高校生会は存続でき ているのか
中尾 元 福嶋健士郎	道德教育 歴史公園を利用した地域活性化の考察 ～登呂公園を事例に～
山内 勇	壱岐市の観光の現状と課題

地域環境計画論 渡辺 豊博ゼミ

栗山 聖玖	ご当地サーモン「甲斐サーモンレッド」の地 域ブランド化に向けた課題とその展望につ いて
古泉 達大	名松線を生かした持続可能な地域づくり ～中山間地域におけるローカル線の今後の あり方～
佐藤 悠介	防災対策から考える減災対策の展望 ～陸前高田市と釜石市を比較して～
田邊日向子	北海道新幹線の開業に伴う沿線の経済効果 と損失及び今後の展望
名取 舞	登下校時の子どもの安全対策についての考 察と検討 ～子ども110番の家の活動実態に着目して～
福田 果凜	静岡県富士宮市における湧水の活用と可能 性について
藤原 南実	地域社会における食品ロスとフードバンク の関連性についての考察 ～フードバンクは食品ロスの解決に役立つ のか・フードバンク山梨を事例に～

地域社会論 田中 里美ゼミ

大岩 淳彦	芸術祭が地域に根付くために必要なファク ター
厚芝 有里 飯倉あやめ	人口減少社会における子育て支援のあり方 現代日本における移住・定住の取り組みと課 題
飯室 樹	フードバンクの可能性 —子どもの貧困から見る—
伊師 明里 伊藤 遼太	日立鉱山と煙害問題 市町村高齢者福祉対策の現状と課題 ～山梨県の場合～
落合 七重	日系ブラジル人の永住パターンの考察 —浜松市を例に—
蒲原まゆみ	受け入れ地域側の学童疎開資料について —昭和と平成の大合併後の状況下で—
星野 雄亮	自治体における外国人住民支援に関する一 考察 ～群馬県太田市を例に～
宮野 慧士	相模湖地域の高齢者にとって住みよいまち づくり
宗形 香名 山崎 大輝	子どもの貧困と公教育の役割の課題 廃校活用による地域活性化の可能性

地域経済論 両角 政彦ゼミ

宇佐美菜々子	南ぬ島石垣空港開港における離島観光経済 の考察
岡山 賢一	「音楽のまち・かわさき」にみる創造産業の 考察

菊島 千里	歴史的建築物の用途転用による地域活性化 —群馬県桐生市を事例に—
進藤亜由美	山梨県北杜市におけるミネラルウォーター 産業にかかわる成長と課題
中村玲三香	エコツーリズムにおける地域参画のしくみ —長野県飯田市を事例に—
本多 孝守	舞鶴若狭自動車道全線開通後における道の 駅「若狭おばま」の変化と役割
町 勇一郎	金沢市の「まち歩き観光」におけるサイensi システムの現状と分析
山口 勇亮	LRT 導入による地方公共交通への影響 —愛媛県松山市を事例に—
雪江 奈桜	6次産業化がもたらす地域への経済効果 —山梨県内の農家レストランを中心に—
藁谷 雄太	料亭の食材調達からみた地産地消 —熱海市を事例として—

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

田口 裕太	鉄道による地方公共交通の持続性について ～台風により被災した JR 名松線・家城駅～ 伊勢奥津駅間の復旧から～
児玉 菜摘	都内における障害児のバリアフリーに関す る実証研究 —放課後等デイサービスでのフィールド ワークを通して—
石川 駆 大塚 千聖	天竜川における治水とその効果 地方都市における生活交通の現状と課題 —岐阜県岐阜市のコミュニティバスを事例 として—
佐野 成美	富士吉田市の空き店舗の現状及び活用に関 する研究
柴 玲生	LRT 計画成功例からみる、既存都市へのコ ンパクトシティの有効な導入 —富山市のライトレールを例に—
高橋 里歩	過去の津波被害からみる大網白里市の津波 対策の有効性
土谷 澄	阿佐海岸鉄道における DMV 導入がもたらす 効果と課題「"DMV" は赤字路線を救えるか」
照屋 秀斗 西村 秋奈	# KuToo の SNS 分析 松本市における民家活用の取り組みについて —主として民泊サービスの観点から—
坂東 達也	日本における無電柱化普及の現状と今後に ついて —イギリス・ロンドンの無電柱化を事例とし て—
平山 梨菜 柳本宗太郎	大月市の遊休農地の活用 日本の自治体における屋外広告物行政の現 状と課題
山本 蓮奈	図書館における指定管理者制度の現状と課 題

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

伊藤 瑠依	新たなコミュニティ形成におけるキーパー ソンの役割 —富士吉田市ハタオリマチフェスティバル を事例として—
雨宮 嶺人	新規参入者の就農における課題 —甲州市の果樹栽培を事例に—

雨宮 利奈	農山村移住者の自己実現における地域おこし協力隊制度の有効性と課題 ―山梨県甲州市の地域おこし協力隊の事例から―
伊藤 大樹	地元農産物の六次産業化事業の成功要因分析 ―美里町付加価値創出支援事業に着目して―
金谷 楓	体験農園の利用促進に向けた課題
北澤 直香	農産物直売所の多様化と地域内共存
辻 拓実	高齢のぶどう栽培農家の経営における現状・課題について ―山梨市牧丘町のぶどう農家を事例に―
中川 瞭	静岡県におけるいちごの六次産業化のプロセスと形態の多様化について
福田あかり	山村留学が継続していくにあたっての課題と今後の可能性
細谷 朋輝	市町村合併に伴う行政の新市域への対応
前原 拓磨	限界集落における撤退戦略の必要性の検証 ―群馬県南牧村熊倉集落を例に―

比較文化学科 令和元年度卒業論文題目

伊香 俊哉ゼミ

- 磯崎 剛輔 音楽と社会の関係性
— 1960年代から70年代のロックミュージックを中心に
- 秋穂 晴菜 日英君主制を比較から考える天皇制の将来
荒武ちはる 自爆攻撃の思想と実態・「特攻」と自爆テロを比較して
- 上原 陽祐 日本統治時代の台湾教育に関して
小林 那歩 太平洋戦争における「日本精神」について
白 鎮慶 1939年以後の中国華北戦場について
— 中国共産党の抗日辺区の展開と日本軍の治安政策の変更との関連性に関する考察
- 福田 佳澄 日本人アメリカ移民と強制収容について
松木愛梨彩 第二次世界大戦期の日米における戦略爆撃
宮下 純奈 現代戦争における子ども兵士
— シエラレオネと日本の事例から
- 山田 恭弘 文求堂主人・田中慶太郎の二つの顔
— 戦前期唐本店主人の経歴と中国認識

内山 史子ゼミ

- 遠藤 恵子 フィリピンにおける「貧困家庭向け条件付き現金給付プログラム」の影響と課題
— 4Psの事例から—
- 芝井 千夏 日本におけるBOPビジネスの可能性
— 低所得者層をターゲットとした包括的ビジネス—
- 藤倉 和泉 インドネシアにおけるイスラームと女性
飯田 風砂 シンガポールの教育制度の実態と問題
岩間 海夏 シンガポールで働く外国人家事労働者
大畑 真子 フィリピン人労働者の海外就労
神谷 祐 ミャンマーにおけるロヒンギャへの迫害
末長 真奈 シンガポールにおける言語使用の変化とアイデンティティの確立
- 高畠 美果 シンガポールのヒット映画に隠された秘密
三上 大佑 フィリピンのメディアにおけるパクラ表象とそこから見える社会的問題
- 堀 実夏子 中国のキャッシュレス社会と日本のキャッシュレス社会の展望
— アリババとテンセントを参考に—
- 堀井 夏美 ベトナムのコーヒー産業の課題
村上さやか 日本における看護師不足とその対策
吉田 梨奈 拡大するイスラム市場とハラール認証

大辻 千恵子ゼミ

- 植村まいこ 「ザ・シンプソンズ」とアメリカ社会
— アニメが映し出す諸課題—
- 遠藤 咲 スウェーデンにおける限らないジェンダー平等の追求
— 1970年代以降に着目して—
- 奥田 英二 在日朝鮮人に対する就労差別
— 法規制から見える現実—
- 小澤ひとみ 1960年代のカウンターカルチャーとは何か
— 愛と平和をうたう若者たち—
- 神村 愛利 幸せな国デンマークを考える
— 守られた労働と生活—
- 川本さくら 日本におけるケルトの受容
— 音楽的側面に焦点をあてて考える—

- 中澤 一聖 文化帝国主義を考える
— 20世紀前半の日本におけるジャズとファッションを軸に—
- 中山 俊 人種とジェンダーの壁を乗り越える黒人女性たち
— 近年の映画から—
- 西村茉莉絵 装いによる自己実現の追求
— 異性装から考える自由な装い—
- 平澤 滯 日本における貧困の克服に向けて
— 非正規労働者の可視化から考える
- 藤長小都音 ディズニー映画と差別
— 近年変化を示す実写版—
- 村上真生子 ある布哇移民一世、村上榮四郎の足跡
— 三世 Jean Sadako Kingに残した日本の心—
- 望月 信国 日系ブラジル人の子どもと公教育
— 群馬県邑楽郡大泉町の事例から考察する—
- 和平 名菜 奴隷制の正当化
— 宗教の側面から奴隷制擁護論を考える—

岸 清香・木村 友彦ゼミ

- 青柳 萌絵 酒造観光が形成する地域の一体化
— 北海道後志における「小樽美人」製造を通じた地域意識の変化—
- 伊藤碧之進 舞台探訪による観光
— 埼玉県秩父市のアニメツーリズムから見る持続性—
- 大道 奏 子どもたちはどう食べるべきか
— 福井県小浜市の「義務食育」による人間形成—
- 高谷 凜 東アジアにおける文化の流れ
— 「ポピュラー」にハマる若者から繋がる日韓—
- 中川ひなの 境界を越え、体験する
— Work Exchangeにおける滞在型国際移動の展開と可能性—
- 松本 琴美 地域アイデンティティとアート
— 「札幌国際芸術祭」に集う人々が模索する「札幌らしさ」の可能性—
- 山本 朱音 協働で創る読書文化
— 長野県塩尻市立図書館と地元書店で本の復権を目指す—
- 若原 瑞貴 神話観光による地域活性化
— 宮崎県神楽における振興と継承の権衡—

齊藤 みどりゼミ

- 花本ひかる 産業発展における移民の影響
— アメリカと日本を比較して—
- 松田 洋右 グローバリゼーションに伴う日本食文化の変容
— ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」を中心に—
- 一色 健秀 終わらない黒人差別
— アメリカ南部を中心に—
- 大串 竜馬 銃規制への遠い道のり
— 捏造された人種のステレオタイプと銃犯罪—
- 桜岡 淳 移民教育再考
— 移民との共生の実現を目指して—

佐藤 雄大 黒人音楽の文化盗用論争について
 清水 怜奈 人種差別を超える
 —黒人女性と白人女性の絆を探して—
 野武くるみ 日本の歴史からみるゲイ社会の形成とレズビアン
 の容認
 長谷川 愛 カリブ海地域のクレオール語からみる文化の形成
 深澤 奈緒 ディズニー映画『ポカホンタス』にみる人種主義
 宮下 真実 イギリスにおける女性労働と日本女性の社会進出の可能性と課題について

佐藤 裕ゼミ

澤田 莉沙 国際ボランティアに見るボランティアと経済の相互連関
 —モルドバとインドネシアの事例を中心として—
 神田 南 越境する人身売買とジェンダー化された脆弱性
 —インドにおけるネパール出身の性産業従事者と女性運動による権利要求
 藤江 沙綾 「開発支援」としてのBOPビジネス
 —日本企業の官民連携による貧困削減の取り組みを事例として—
 内藤 篤哉 アフリカにおけるインターネットの普及
 —情報発信と送金による貧困削減の可能性
 村田 朱音 「国際協力」としての技能実習制度にみる移民問題の不可視化
 —ベトナム人実習生を中心として—
 山田裕紀子 インドの経済発展と児童労働の存続意義
 亀谷 和花 ロサンゼルス暴動にみる都市貧困と人種・エスニック関係
 —アフリカ系と韓国系住民の対立構造に着目して—
 越川 優花 中国の都市再開発にともなう非自発的移動と生活再建
 —湖南省長沙市の事例から—
 藤井さやか 静岡県下田市における観光地形成
 —宿泊業従事者の労働過程に着目して—
 真柴ピンヨチ ハファエウ
 ブラジルにおける日系移民を取り巻く排斥と包摂の過程
 —「祖国」日本の経済発展とのかかわりから—

志村 三代子ゼミ

渡辺 大司 山梨県の映画文化的欠如
 大井 美沙 映画『dieAter documentary of ED"摂食障害"』分析
 大屋智佳子 トイ・ストーリーとホモソーシャル
 栗原 遼 北野武映画にみる「暴力」の魅力
 黒羽 南萌 『千と千尋の神隠し』
 —宮崎駿作品との比較と込められたメッセージ—
 ジェドウシキナ エカテリーナ
 映画『パレードへようこそ』の表象分析
 雫田 真慈 様々なメイク作品から観る『十二人の怒れる男』
 鈴木隆太郎 日本の異界観念
 —『もののけ姫』と『千と千尋の神隠し』を通して—

近本 里美 子供を記録する映画
 —羽仁進にとっての“記録”について—
 藤原貫太郎 『田園に死す』と『草迷宮』の比較からみる寺山修司の「虚構」
 溝呂木祥平 塚本晋也作品における都市から自然への舞台変遷
 山岸 茉由 キャラクター化していく『貞子』
 —貞子像の変遷と現代社会—
 山本こまち レニ・リーフェンシュタールによる民衆の演出
 渡会 奏詩 映画『カンナさん大成功です』から見る女の表象

邊 芙浩ゼミ

加藤 桃子 文学における女性
 —女性の主張と社会への影響—
 中田 遥菜 サイバーネット空間研究
 —ウィキリークス以後の世界—
 小友 優花 女性労働の現状と課題
 —日韓を比較して—
 塩入 菜々 韓国語の特徴的表現
 金 春燕 日本の観光振興について
 中川 亜実 オリンピックにおけるナショナリズムの問題について
 李 ロウン 都市農業の現状と展望
 —日韓の都市農業—
 小林 里沙 武士道と日本人の本質
 家形 彩加 BC級戦犯裁判
 齊藤 光司 在日文学研究
 —李良枝の場合—
 笹川 剛 強制徴用工問題
 丸山かほり 韓国の多文化社会の形成
 朴ミンヒョン 日本における外国人労働者の現状と展望
 田村 涼香 美人論
 —美人とは何か—
 美馬 佳苗 SNSが武器となる情報戦争の時代

分田 順子ゼミ

中嶋 航平 オーストラリアにおける移民への言語政策
 —その変遷と担い手の多様性を中心に—
 中村 留依 男性稼ぎ主モデルからの脱却を目指して
 —スウェーデンに学ぶ持続可能な社会の在り方—
 渡辺 万葉 テレワークは日本人の働き方をどう変えるか
 —正規雇用者向けテレワーク制度を中心に—
 梶山 未来 在日外国人が医療機関を受診するには
 —日本の医療通訳制度の現状と課題—
 菊池 架南 アフガニスタンの少年兵
 —社会復帰への国際的な取り組み—
 草刈由紀菜 シンガポールの外国人家事労働者
 —地位向上を目指す女性たちの声と戦略—
 小瀬 志音 日本の母子家庭における子どもの貧困
 —政府・企業・NPOによるシングルマザーに対する支援の現状—
 佐藤 史佳 地域猫活動からみる人と動物の共存
 —鍵を握る地域住民のコミュニケーション—
 篠崎 万穂 旧ユーゴ紛争がもたらしたものの
 —一人々の生活と民族意識の変化を中心に—
 菅原 和希 災害時における女性へのDV・暴力
 —潜在化した暴力の背景を探る—

- 鈴木みなみ 言語教育を通じた共生社会の模索
—移民の子供たちへのドイツ語教育を中心に
- 鎮西 加奈 都市型民泊の現状と課題
—新宿区の経験を中心に
- 山口 裕矢 日本の介護現場における外国人介護士と協働
—その現状と課題
- 伊藤 叶奈 なぜ待機児童は0にならないのか
—保育士の低賃金問題をを中心に

水野 光朗ゼミ

- 小野 克也 日本のビール産業について
- 世嘉良規明 遊戯産業の歴史
- 倉本遼太郎 イメージトレーニングについて
- 徳田 絢香 日米間におけるヒップポップ文化の比較
- 奥田みのり サンリオのキャラクターについて
- 神田愛里紗 Food Culture in the World
- 安武 実紀 香りと宗教について

山本 芳美ゼミ

- 今井 真弥 他者への恐怖そして攻撃
——捕鯨からみるエスノセントリズム
- 板坂 郁花 近現代の家庭料理と良妻賢母イメージ
- 辻本まり子 日本人の歯並び観
——1945年から現代までの新聞雑誌記事の
分析をもとに
- 天野 初音 民俗芸能の継承に伴う課題
——山梨県大月市「笹子追分人形芝居」を事
例として
- 伊藤祐希子 1960年代以降の制服の要否議論の変遷
——都立高校生による「制服運動」の事例分
析を通して
- 木村 仁深 インドにおける食卓での宗教実践
——ベジタリアンの多様性に着目して
- 小谷 成 お歯黒とホワイトニング
——その美意識と価値観の変化
- 斉木 香穂 観光資源化する即身仏信仰
——湯殿山周辺の事例を中心に
- 佐次田芙未 捕鯨を「利用」する人々
——山口県長門市通地区の住民と自治体、反
捕鯨団体との関係性
- 清水 彩 旅行雑誌『旅』に見るアイヌ表象の変遷
——1950年代から1990年代を中心に
- 高見 知里 下着広告における「見られる性」としての女性
——ワコール1980年代から90年代の
TVCMの分析を通して
- 劉 穎 穎 日本と中国における護符文化の比較研究
- 渡邊 千紗 山形県における紅花産業
——みちのくに根付いた上方文化

文学専攻科 令和元年度研究論文題目

佐藤 隆 先生

- 林田 小葉 特別支援学校における「ことば」の指導の在り方
～サイン言語に着目して～
- 福島 元 「つながり」を求める教育実践の検討
～山崎隆夫先生の実践を参考にして～

大学院文学研究科 令和元年度修士論文題目

国文学専攻

鈴木 武晴 先生

- 山岡 美咲 上代文学と葉
—記紀における植物由来の地名を中心に—

社会学地域社会研究専攻

前田 昭彦 先生

- 小俣 溪和 神奈川県相模原市で行われている外国人向け日本文化体験ワークショップ「Japanese Textile Workshop」についての研究

英語英米文学専攻

儀部 直樹 先生

- 高柳 大輝 The Best Story Full of Richness: Savouring Mitch Albom's *Tuesdays with Morrie*

Kolawole Olagboyega 先生

- 飯島 智美 Teaching and Learning Grammar for Communication: Applying Communicative Language Teaching Approach to EFL Classrooms

Hywel Evans 先生

- 長谷部夏江 Researching the Effect of L1 Embedding as a VLS in EFL

臨床教育実践学専攻

鶴田 清司 先生

- 菊地 克哉 「自分の見方や感じ方」を育てるための図画
工作指導の一提案
～表現と鑑賞の一体化に向けて～



2019年度英文学科英文学会共催後期講演会

言語の変身／文学の冒険

開催：2019年11月12日(火)

講演者：多和田葉子氏

満谷マーガレット氏

2019年度英文学科英文学会共催後期講演会は作家の多和田葉子氏と翻訳家の満谷マーガレット氏をお招きし、「言語の変身／文学の冒険」という題でワークショップを行いました。

会は、Hywel Evans 英文学科長と福田誠治学長の挨拶から開始しました。ワークショップでは、学生たちが事前に多和田氏の『献灯使』とその英訳 *The Emissary* をそれぞれ読み勉強し、原文と満谷氏訳を比較して自分たちが興味を持った箇所や疑問に思ったことについて質問をしたり感想を発表し、それらについてコメントをいただきました。『献灯使』は、大震災を経て、全く変わってしまった近未来の日本を舞台にした作品ですが、多和田氏独特の日本語の言葉遊びがたくさんちりばめられており、それをどのように英語に翻訳できるのかについて、多くの学生から疑問や感想が寄せられました。

例えば、原文で登場人物の義郎が歯が

欠けてしまい歯医者に行く場面がありますが、そこで普段から物書きをしている義郎は「欠けてしまった」を「書けてしまった」と言い間違えてしまいます。満谷氏の翻訳では“Fall out”（「欠けてしまった」）と言おうとしたところが“fallout”（「放射性物質」）となり発音の掛詞になっていました。そのため原文の義郎が普段から書き物をしているためそのように間違えてしまったという意味合いが英語訳では抜け落ちてしまっています。しかし、“fallout”という単語は放射性物質という意味を持っており、それを掛詞にする事により作品の舞台である東日本大震災のあとの世界をより強調するものとなっていて、それを意図的に表現したという満谷氏に感嘆の声が上がりました。そしてその手法こそが翻訳の面白いところであり、言葉の冒険・変身であるという多和田氏の言葉に会場が沸きました。

今回私がこのワークショップで感じた

ことは、日本語を英語に翻訳することの難しさ、そして『献灯使』という作品の面白さでした。日本語にしかない表現や言葉遊びを翻訳する際に、その意味を忠実に英語に翻訳することは困難ではあるものの原文の面白さをそのまま残すというのはすごく高度な技術であると思います。その技術をもつ満谷氏に尊敬の念を抱きました。加えて、『献灯使』という作品は一見現実離れしているように思えるものの、現代の社会が抱える問題をユーモアを交えて表していて理解を深めていけばいくほど面白く感じられる作品であると感じました。初めてのワークショップ形式の講演会ということで学生側に緊張が見られる場面がありましたが、多和田氏と満谷氏のそれぞれの作品への思いやこだわりに触れることができ、ワークショップを心から楽しむことができました。また翻訳について学ぶことができ、充実した講演会であったと感じました。

(英文学科1年 内村 綾里)

講師紹介

多和田 葉子（たわだ ようこ）

1982年早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業。同年ドイツに渡りハンブルグ大学修士及びチューリッヒ大学博士課程を修了。文学博士（ドイツ文学）。1993年に『犬婿入り』で芥川賞を受賞した他、泉鏡花賞、谷崎潤一郎賞など多数の文学賞を受賞している。ドイツ語での作家活動では1996年シャミッソー文学賞、2016年にはクライスト賞を受賞。今回のワークショップの題材である『献灯使』を含む様々な著書で人気を集めており、日本で一番ノーベル文学賞に近い作家として注目を浴びている。



満谷マーガレット（みつたに まーがれっと）

アメリカ、ペンシルバニア州ピッツバーグ出身。ウスター大学卒、東京大学大学院比較文学比較文化修士課程修了。椋山女学園短期大学部、東京工業大学、大妻女子大学、共立女子大学等で教える。多和田葉子、角田光代、大江健三郎などの作品を翻訳。訳書に *The Eighth Day*（角田光代『八日目の蟬』）、*An Echo of Heaven*（大江健三郎『人生の親戚』）などがある。今回取り扱う *The Emissary* はアメリカで最も権威のある文学賞の一つである全米図書賞（翻訳文学部門）を受賞した。





都留文科大学国語国文学会秋季講演会

「国語教育 混迷する改革」

開催：2019年11月20日（水）

講演者：紅野謙介氏

新学習指導要領をめぐる国語教育に関する議論は喧しく、「国語教育」を冠した雑誌の特集、シンポジウムの開催もかなりの数となっています。

改革批判の端緒となったものが、紅野謙介先生の『国語教育の危機』です。先生は近代文学研究者と同時に教育者であり、大学院在学中から都内有数の中高一貫の進学校において教鞭をとられ、国語教育への関心は高く、既に四年前、山梨県内の高校において講演されています。

今回は、「国語教育 混迷する改革」と題し、前日には、参院文教科学委員会に参考人として出席されています。先生は、今日の教育界の動

向を、明治期の学制発布、戦後の学校教育法施行、それ以来の、最大の教育改革と捉え、今日の流れを、何が、どのように問題であるかを具体的に抽出し、論を展開されました。

新学習指導要領の科目構成の変更に伴う問題点を明確にし、一方の新学習指導要領を推進する立場にも言及され、そこには公平、公正が見られ、研究者としての良心があり、単に現在の方性、流れへの批判という域に留まらない、建設的なものでありました。

先生は結びに、現今の流れを視野に、国語力の低下を懸念し、回避するため、「適切な教材とことばの教

育」に着目され、その再確認の必要性を説かれ、教材アンソロジーの意義として、生徒と教師と教材の関係をどう捉えるか、問題提起されました。また、教材という「他者のことば」を教室に入れ、教師－生徒という縦の関係に終わらない力学の導入や、様々な教材に接することで、生徒たちの多様な声、複数の主体を刺激する環境を用意してきたことなど、これまでの教師たちの取組や蓄積を評価されるなど、力強い声援もありました。

映画「天気の子」中の「大丈夫」の会話を引用し、日本語の複雑さと奥行き、会話の持つダイナミズムにも言及され、学生時代には早大シネマ研究会に属し、その黄金期をつくった初期メンバーであることを彷彿とさせました。

ご講演は明快な論の展開、口調と相俟って、内容は刺激的であり、国語教育、文学の領域に留まらない、示唆に富んだものでもありました。講演会終了後、旧交を温める中、「ことばを生きる ことばで生きる」と色紙に揮毫され、この表現にこそ、紅野先生の真骨頂が表れており、象徴的と思われます。

講師紹介



紅野 謙介（こうの けんすけ）

日本大学文理学部教授・文理学部長。1956年、東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院中退。麻布中学高等学校の国語科教員を経て、現職。公益財団法人日本近代文学館理事。著書に『書物の近代 メディアの文学史』（ちくま学芸文庫）、『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』（新曜社）、『検閲と文学』（河出ブックス）、『物語岩波書店百年史（1）「教養」の誕生』（岩波書店）、『国語教育の危機』（ちくま新書）、最新の編著に『どうする？ どうなる？ これからの「国語」教育 大学入学共通テストと新学習指導要領をめぐる12の提言』（幻戯書房）など。

（国文学科特任准教授 小石川正文）



開智学校、1876年(明治9年)、松本市



2019年度学校教育学科講演会

「学校ルネッサンス 学校建築：来し方・行く末」

開 催：2020年1月22日(水) 講演者：上野 淳氏

今年度の学校教育学科講演会は、首都大学東京の学長である上野淳先生をお招きし、「学校ルネッサンス 学校建築：来し方・行く末」と題してご講演いただいた。

日本の学校建築の起源が明治中期の“4間×5間×天井高10尺の南向き教室＋片廊下”という設計にさかのぼる事、そしてそれ以降、現代に至るまで過去100年間、日本の多くの学校建築は画一的で全く変化がなかったことが紹介された。一方で、海外に目を転じると、イギリスでは1960年代には「Children and Primary」すなわち、「一人ひとりのための学校」、「個人と個性を尊重する教育」というコンセプトの学校改革の中で、児

童の主体性を引き出す自由な学びを体現した校舎が建設されていたという。またアメリカでは1970年代には巨大なオープンスペースを用途に合わせてフレキシブルに使う校舎が登場し、ここでも児童や生徒の自由で主体的な学びが保障されていた。同じ時代の日本はというと、長い間、画一的な学校建築の中での一斉授業が中心となっていた。日本の教育で近年叫ばれている「主体的・対話的で深い学び」が長い間、日本で実現されなかったのは、日本人特有の気質なのか、教育政策の問題なのか、それとも学校建築のせいなのか、と考えさせられた。もちろん、全国の学校現場では、限られた環境の中でも創意工夫をし、主体的・対話的

で深い学びを子どもたちと実践している教員も確実に存在する。ただ、少数の教員の個人的努力には限界があるのも事実だろう。人は環境で変わるし、環境は人が創ることのできるものだと思う。

上野先生が設計を手掛けた学校は、どれも先進的で新しいアイデアに満ちていた。「住居としての学校」というコンセプトで設計された学校は、子どもたちが長時間過ごす学校が、自分の家のようにストレスなく、自分のペースで楽しく過ごすことのできるよう、徹底的に子どもの目線で設計されていた。「学校は街」というコンセプトの学校では、校門も塀もなく、街の中に学校が溶け込んでいた。この他、「街が魅力的に見える学校」「コミュニティと共生する学校」では、学校と地域の境が限りなく取り払われ、子どもたちが地域の大人やお年寄りとの交流の中で、見守られ、学び、社会性を身につけることができていた。こういった取り組みが先進的事例として終わらぬよう、多くの学校で、より多くの子どもたちにとって、学校が楽しい学び舎であり、社会性と豊かな感性を育み安心して通える場所になるよう、教育に関わる者として何をすべきか・何ができるかを考えさせられた講演会であった。

(学校教育学科教授 別宮有紀子)

講師紹介



上野 淳 (うえの あつし)

1948年生まれ。1977年東京都立大学大学院博士課程修了、工学博士。首都大学東京大学院建築学専攻教授、首都大学東京基礎教育センター長などを歴任し、2015年から首都大学東京の学長を務める。首都大学東京名誉教授。建築計画学、環境行動学、環境心理学が専門。学校、病院、高齢者施設などの地域公共施設計画を幅広く手がけ、計画指導・コンサルタントとしても活躍。1995年に「生活者に立脚した地域公共施設の建築計画に関する一連の研究」論文で日本建築学会賞を受賞。その他、文部科学省の学校建築関係の委員会やプロジェクトの委員長を歴任。著書『未来の学校建築』(岩波書店)、『学校建築ルネッサンス』(鹿島出版会)など。



学校教育学科講演会

「子ども主体の教育：フランス・フレネ教育の真髄とは？」

開催：2020年1月30日（木）

講演者：アンリ＝ルイ・ゴ氏／フレデリック＝マリー・プロ氏

1月30日16時半より、本学2101教室にて、瓦林先生のコーディネートによって、アンリ＝ルイ・ゴ先生とフレデリック＝マリー・プロ先生による講演会が行われました。会場はいっぱいとなり、立ち見もでるほどで、250名以上の参加者となりました。お二人は、フランスで誕生した子ども主体の自由教育「フレネ教育」の研究の第一人者です。

1920年代というまだまだ子ども中心の教育の思想が根付いていない時期にありながら、子どもに自由に表現させることを土台に、学習者中心の教育方法を先駆的に創造したセレスタン・フレネ（1896-1966）。このフレネ自身が創立した森に囲まれた小さな学校が、今もなお公立学校として南仏の街ヴァンスに存在

しています。そのフレネ学校における過去と現代の教育実践を研究しているお二人が、フレネ教育の持つ子ども主体の教育のエッセンスについて、貴重な戦前・戦後の写真なども交えて、分かりやすく簡潔にお話しして下さいました。

テーマは「子ども主体の教育：フランス・フレネ教育の真髄とは？」というもので、第一部をゴ先生が、第二部をプロ先生が担当。第一部は「フレネ教育の誕生」と題し、フレネ教育がフランスにおいてどのようにして生まれたのかについて紹介し、第二部は「フレネ学校における現在の教育実践」とし、今現在のフレネ学校が如何に機能しているかについて、詳しい説明や解説を加えながら説明をされました。

質疑応答では、フランスと日本の公教育の違い、フレネ教育の中で作文、図工、音楽等の表現にかかわる科目を重視していることの意義などについて出され、それをめぐって様々な意見が交わされ、熱い議論が繰り広げられました。

講演会終了後も質問が続き、夜遅くになっているにもかかわらず、廣田研究室に場所を移して、山口先生、十川先生も参加して、2時間ほど質疑応答や討論が続きました。

お二人はこの他にも、学校教育学科・大学院の専門ゼミ、教職カフェにもご参加頂き、を多くの学生・院生のご指導を頂きました。

（学校教育学科教授 廣田 健）



講師紹介

アンリ＝ルイ・ゴ／フレデリック＝マリー・プロ

フランス・ロレーヌ大学教育学部準教授。同大学 LISEC 研究所研究代表。フレネ教育研究の代表的研究者で、セレスタン・フレネやその妻で共同研究者でもあったエリーズ・フレネとも親交があった。フレネ教育の後継者である娘のマドレーヌ氏からフレネの残した膨大な資料を託されて研究をすすめている。



ジェンダー研究プログラム講演会

女性の貧困、生きづらさについて考える

～シングル女性の現実から～

開催：2019年12月17日（火）

講演者：飯島裕子氏

2019年12月17日（火曜日）に、飯島裕子さん（ノンフィクションライター、東京福祉大学社会福祉学部専任講師）によるジェンダー研究プログラム講演会が開催されました。

講演会当日は、世界経済フォーラムによるジェンダー・ギャップ指数について、日本のランキングが110位から121位に下がったことを発表された日でした。そのこともあってか、40名以上の参加者で大変に活気のある講演会となりました。

飯島さんが聞き取ってこられた、非正規、あるいは、無業のシングル女性の多様な語りから、女性の貧困と生きづらさの現実を知るとともに、そのような現実が不可視にされてしまう構造や、それを打開する支

援策についても考える機会となりました。

講演会のなかで紹介された5人の女性たちの語りから、学歴でも、都市か地方かでも、家族構成でも、年齢でも切り分けられない女性たちの多様で複雑な状況が共有されました。セーフティネットとするにはあまりにも脆弱な家族の状況、ニートや引きこもり支援が男性に偏り、実態とは異なって“家事手伝い”として許容される現況、据え置かれる男女間の賃金格差、それらに関わる女性の経済的自立に対する期待の低さなどによって、女性の生きづらさが男性のそれらと重なりながらも異なることが理解できました。また、現行の“女性活躍推進”が女性たちの

働き方や生き方を支えることを目指すとしても、それが特定の女性たちにしか届き得ず、さらなる女性間の格差拡大に与することについても考えさせられました。

飯島さんが指摘したように、このような状況の背景には高度経済成長期に完成した男性稼ぎ主モデルと性別役割分業体制・規範がありました。これらは男性雇用の不安定化や未婚率の上昇、多様なライフスタイルの広がりの中にあって、随分とその基盤が失われつつありますが、いまだその残余によって、“当たり前”に存在してしまっている女性たちの貧困は据え置かれたままです。そのような状況に対する支援と、そのような支援が必要とされない社会が求められていることが共有されました。

講演後、参加者から、飯島さんが出会った女性たちが置かれている状況の詳細に関わる質問や、女性の政治参加についての質問がありました。質疑応答を通じて、ジェンダーが古くて新しい問題であること、それがどこかの誰かではなく、わたしたちの問題であることが改めて確認されました。

講師紹介

飯島 裕子（いじま ゆうこ）

東京都生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程満期退学。大学卒業後、専門紙記者として勤務後、雑誌編集を経てフリーランスに。人物インタビュー、ルポルタージュを中心に『ビッグイシュー日本版』、『Yahoo! ニュース個人』等で取材、執筆を行っている。著書に『ルポ 貧困女子』（岩波新書、2016年）、『ルポ 若者ホームレス』（ちくま新書、2011年）などがある。



（地域社会学科講師 富永貴公）



卒業演奏会を終えて

2016年4月、私は大学生活4年間に大きな期待と少しの不安を抱きながら、音楽専攻生としてこの都留文科大学に入学しました。この4年間、辛い時も楽しい時も、音楽は常に私の側にありました。

初めて卒業演奏会を見た1年生の冬、大舞台上で堂々と演奏をする先輩方はとても輝いて見えた一方で、自分たちの番がくるとへの焦りや不安を感じていたことを鮮明に覚えています。

あつという間に時は流れ、私も卒業演奏会を迎える4年生になりました。卒業演奏会までの期間は、大学生活の中で一番音楽と向き合った期間となりました。力不足で思うように弾くことができずに悔しさを感じたり練習が嫌になったりしたこともありましたが、そんな時も音楽棟へ行くと練習に励む同期や後

輩がいました。たくさんの勇気を貰い、また練習に取り組んでいくことで、曲への理解も深めていくことができました。

そして迎えた本番。4年間で学んできたこと、感じてきたもの、その全てを曲の中に込めて自分らしく楽しく演奏することができたと思います。

4年間ご指導下さった先生方、共に切磋琢磨してきた同期、目標だった先輩方、支えてくれた後輩たちや友人、そして最後まで支えて見守り続けてくれた家族、そんなたくさんの大切な方々に見守られながら感謝の気持ちを込めて演奏できたことを心から幸せに思います。

音楽専攻で過ごした4年間は、私の一生の財産であり宝物です。

(初等教育学科 音楽専攻 4年 代表 野地和香奈)

卒業制作展を振り返って

卒業制作の作品を完成させるために、私たち図工・美術専攻の4年生は一年間という長い期間、制作活動に没頭してきました。伸び伸びと気の向くままに筆を走らせる者や、反対に自分が今何を描きたいかわからず苦悩する者と、各々が制作を通して自分自身と向き合いながら、最後の学生生活を過ごしてきました。そして、勿論私も美術を通じて一年間自分と向き合い続けた人間の一人です。

4年次に進級する以前から、私は夏に控えた教員採用試験に合格するべく、対策に追われる日々を送っていました。卒業論文や卒業制作などの、やるべきことに振り回されながらの毎日は今まで経験したことのない多忙さだったことを覚えています。そんな中で私がゼミの時間に取り組んでいた創作活動は、水彩画で色のグラデーションを表わすことでした。きっかけは、偶然できた色の重なり気づいたことからです。美しい色合いを見た瞬間、それまで試験などの要因で重圧を感じ続けていた心が、少し軽くなった気がしたのです。改めて色が人の心を動かす力を持つことを学んだ私は、それ以来水彩画の色づくりに没頭し続けたのです。

こうして完成した私の作品は全て、色で私自身の内面を表現したものになりました。

一年間、自らの思いと向き合い続けて作り上げた作品たちは、紛れもなく「私の分身」であり、私に自らの強さや弱さを教えてくれました。

私たちの卒業制作展『波紋』(会期:令和2年1月29日～1月31日)は、こうした自分自身と向き合い続けてできた作品に溢れたものになりました。図工・美術専攻の仲間たちが日々取り組んでいる姿を、互いに知っているからこそ、チーム一丸となって協力し合いながら準備を進めることができました。残念ながら、大雪の影響で会期の変更に加えて、例年会場となる本学コミュニケーションホールのアートシアターを使ての展示が叶わず、急遽、美術棟での開催となりましたが、地域の方々をはじめ、お世話になった方々、本学関係者や多くの友人たちがお越し下さり、たくさんのご感想を頂戴いたしました。

こうして自由に制作することを通して、自分自身と向き合える作品を描くことができたのは指導して下さった先生方のおかげです。そして、仲間たちと楽しく、刺激し合いながら学び合えたことを、大変嬉しく思います。

最後に、お忙しい中、私たちの卒業制作展に足を運んでくださった方々並びに関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

(初等教育学科 図工・美術専攻 守屋 博貴)



卒業制作展 平面ゼミ 展示風景



卒業制作展 立体ゼミ 展示風景

市民公開講座 「かけっこ教室」を開催



地域交流研究センターでは、令和元年12月1日（日）都留文科大学体育館において、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催しました。参加者は、小学校1年生から6年生まで、30名でした。

今回指導を行なったのは、ロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加特任講師と本学陸上部の学生2名です。

ウォーミングアップのランニングから始まって、ラインの上を走るライン走やマーカーコーンを利用したマーク走などを通して、走るコツを学びました。



参加者の感想

- ・たのしかったからまたやりたいです。(小1)
- ・速くはしれたから、うれしかった。(小2)
- ・ぼくは、サッカーをならっているので足がはやくなってよかったです。(小2)
- ・足が速くなるように今日習ったことをたくさんれんしゅうして足を速くしたい。(小3)
- ・体をうごかしながらあそびで楽しめたのでよかったです。(小6)

市民公開講座 「DIGITAL ずこうしつ ワークショップ」



地域交流研究センターでは、2020年1月25日（土）都留文科大学美術棟のDIGITAL ずこうしつにおいて、小学生向けの市民公開講座「DIGITAL ずこうしつ ワークショップ ―ここに残る大切なことばを刻もう―」を開催しました。

今回指導を行なったのは、青木宏希学校教育学科特任教授と、杉本光司情報センター特任教授、大学生スタッフ3名です。

参加者は都留市内の小学校4、5、6年生9名でした。

今回の講座では、木の枝に好きな文字や絵をレーザーカッターで彫り、オリジナルストラップをつくりました。材料となる木の枝は、参加した小学生が学生スタッフと大学のうら山に登って探したものです。のこぎりを使っ



て加工した後、DIGITAL ずこうしつのパソコンを使って枝に彫る字をデザインしました。

以下、参加者の感想を紹介します。

- ・レーザーとかはじめてなので楽しかったです。(小5)
- ・このような自然の物をつかってつくったりコンピューターで字をかけたりできてたのしかった。(小5)
- ・失敗もあったけど楽しくがんばって、いいのものができました。このきかい、ありがとうございました。(小5)
- ・楽しかったです。ありがとうございました。(小4)



第64回文部科学大臣杯 全国青年弁論大会 一般の部 優秀賞受賞



比較文化学科2年
水野 凜



私は昨年11月に開催された、第64回文部科学大臣杯全国青年弁論大会において、最優秀賞に次ぐ優秀賞を頂きました。弁論とは、日本語のスピーチで、社会問題や生き方の提言を、原稿を暗記し、約7分間聴衆の前で話すという競技です。私は高校の頃に弁論部に所属しており、何度か全国大会に出場したのですが、1度も入賞できずに引退しました。今回、お隣の東京都で大会が開催されると聞き、恩師の先生のお誘いもあり、出場を決めました。

昨年の夏休みに1ヶ月韓国に留学した際に、テレビで見るものと、実際に自分の目で見た韓国は全く違っていたという体験を元に、今は政治面では戦後最悪の日韓関係と言われているが、若者は音楽などを通して互いに興味を持っているまたとないチャンスが訪れており、今こそ互いに歩み寄るべきだと述べました。念願だった全国入賞ができ、嬉しい気持ちと共に、応援してくださった方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

サークル紹介 少林寺拳法拳士会

国文学科3年 小笠原 希

こんにちは！少林寺拳法拳士会です。私たちは、少林寺拳法の目指す人間像・心身ともに健全で頼りになる人間になるため、日々少林寺拳法の練習に励んでいます。

昨年は、新歓活動でのパフォーマンス、中部新歓合宿や夏合宿、昇級・昇段試験の受験、県大会や全国大会などの大会への参加、桂川祭への出店など、精力的に活動してきました。練習はとても楽しいですが、たまにつらいときもあります。それでも、同期、先輩、後輩、指導者の方々などいろいろな人に助けられて何とかやってこられました。また、おかげさまで、山梨県大会、中部大会の団体種目では最優秀賞をとることができました。個人や二人組で行う種目でも最優秀賞・優秀賞・優良賞などをとることができました。

昨年12月に私たち3年生は引退となり、1月から2年生主体の新たな体制がスタートしました。新しい学年はとても意欲的に活動してくれているので、来年度は今年度以上に素晴らしい部に育ててくれると思います。応援よろしくお願いします。



編集後記

佐々木南実

平成 31 年度に文学部国際教育学科に着任し、広報委員会に所属させていただいています。都留での仕事はすべてが初めてづくしの私にとって、広報委員会の業務は都留文科大学の全体像を知るための絶好の場となっています。大学案内、オープンキャンパス、学報と、受験生や現役学生、卒業生や教員のみなさんから見える都留文科大学の景色を発信者のサイドから見るのが広報の醍醐味ではないでしょうか。

先輩の先生方そして企画広報担当の皆さんに業務について教えていただきながらあっという間に 1 年が過ぎようとしています。昨年は台風 19 号により秋季オープンキャンパスが中止となるイレギュラーな事態もあり、大学行事の取りまとめの大変さのみならず、非常時における対応の重要性についても目の当たりにしました。

世界的なグローバル教育、21 世紀教育の潮流の中で、国際バカロレアの教員免許である International Baccalaureate Educator Certificate の取得が可能な東日本唯一の大学として、ユニークな立ち位置を確保している都留文科大学。これからも本学の特色を効果的に発信するため、そして一人前の広報委員となるため、頑張っていきたいと思っています！



広島県の離島に新設された国際バカロレア認定校、広島県立広島観智学園中学校・高等学校さまに訪問させていただきました。中高一貫、全寮制で探究的な学びを実践する、先進的な学校です。都留文科大学の卒業生がここで教壇に立つ日も遠くないと確信しています！

ぶんだいい堂

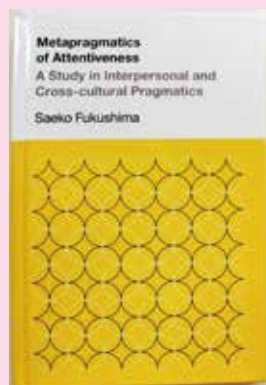
文化表象としての村上春樹



野中 潤 共著
2020 年 1 月発行
青弓社

◇のなか じゅん
国文学科 教授

Metapragmatics of Attentiveness
A Study in Interpersonal and Cross-cultural Pragmatics



福島佐江子
2020 年 2 月発行
Equinox Publishing

◇ふくしま さえこ
英文学科 教授

大学的 富士山ガイド
こだわりの歩き方



加藤めぐみ・志村三代子・
ハウエル エバンス 責任編集
2020 年 2 月発行
昭和堂

◇かとう めぐみ
英文学科 教授

公立大学法人
都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL : <http://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第 142 号 2020 年 3 月 9 日発行

都留文科大学広報委員会

鈴木健大 (委員長)・日向良和 (副委員長)・新保祐司 (担当副学長)・長瀬由美・加藤めぐみ・
齊藤みどり・佐々木南実・水口 潔・山口博史・藤江 毅・小林泰憲 (経営企画課長補佐)・
清水友美子 (企画広報担当)・関戸聡子 (企画広報担当)